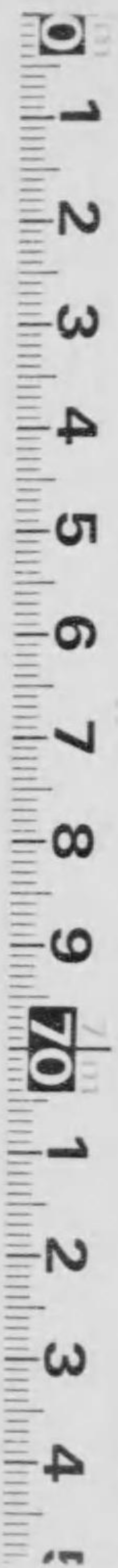


W. W. W. - Szablon



戶澤姑射
淺野馮靈
共譯



始



文學士
戶澤姑射
譯

沙翁全集

第七卷

ジリス・シザ

發兌

大日本圖書株式會社

明治十四年四月版
大正
2. 3. 12
購求

序

題して「ジュリアス・シーザー」と稱すれども、此劇の主人公はシーザーにあらずしてブルータスなり、シーザーは帝に第三幕に於て殺害せられ、第四幕以下再び現れ出てざるのみならず、其人物性格の描寫、所詮此大活畫の後景中に屬すべきものたり、勿論沙翁は此劇中に於て彼が胸中のジュリアス・シーザーを描出せむとしたるにはあらざるべし、故に讀者若し此劇に於て、歴史上の大偉人ジュリアス・シーザーに接せむと思はゞ、是誤謬なり、然れどもシーザーにも劣らざる大偉人ブルータスが、愛國憂世の

大精神と、正義正道に凝固まりし鐵石心とが、羅馬末世の活舞臺に火花を散すの偉觀に接するを得ては、如何なる讀者も敢て失望の嘆を發するを須ゐざるべし。

又此劇は、右の如く假主人公ジュリアス・シーザーが第三幕に於て殺害せられ、第四幕以下俄かに寂寥の感あり、爲めに全篇恰かも二個の調子を異にせる悲劇より成立つが如き感ありとの理由に依り、古來多少の非難を道かれざりき、されど一方にはかゝる非難あるにも拘らず、常に沙翁劇中の傑作の一に數へられ、又之を舞臺の上に乗せては、篇中女氣少く、些の艶氣なきにも拘らず、書下し以

來今に至るまで何處の興行にも、大當を取らざることなしと稱せらる、此點に就き沙翁と尤も面白き對照をなせるは、沙翁が同時代者ベン・ジョンソンなり、ベン・ジョンソンも亦羅馬劇を作りたる劇詩家なるが、彼は博學宏識の學究なれば、羅馬の風俗習慣等を巨細に研究し、之が結果を適用したるが故に、彼が羅馬劇は劇中の事變、人物の科白等一々典故あり、其脚本を一見すれば、古實を引用せる註釋無數にあり、以て勞力の如何ばかり多大なるかを示し、且つ作劇の手腕に於ても、慥かに一代の巨匠たるを失はざるを示せり、之に比すれば沙翁の如きは、一見甚だ寡

聞淺學の觀あり、然れども事實に於てはジョンソンの博學なる羅馬劇は一般に忘却せられ、却つて寡聞淺學の沙翁が羅馬劇は、日一日と世界中に其聲價を高め行くなり、蓋し或評家の言に、ジョンソンは技術の巧妙を盡したる彫像を吾人に遺したり、然れども沙翁は生ける男女を遺したりと云ひたる、正しく此間の消息を説明せるものと云ふべきか。

序ながら、本篇の譯者は、本篇を譯するに當り、篇中のトガキは重にサー・ヘンリー・アーウキング氏の全集に従ひ、又全躰の譯文に於て、坪内博士が明治十六年出版の「該撒奇

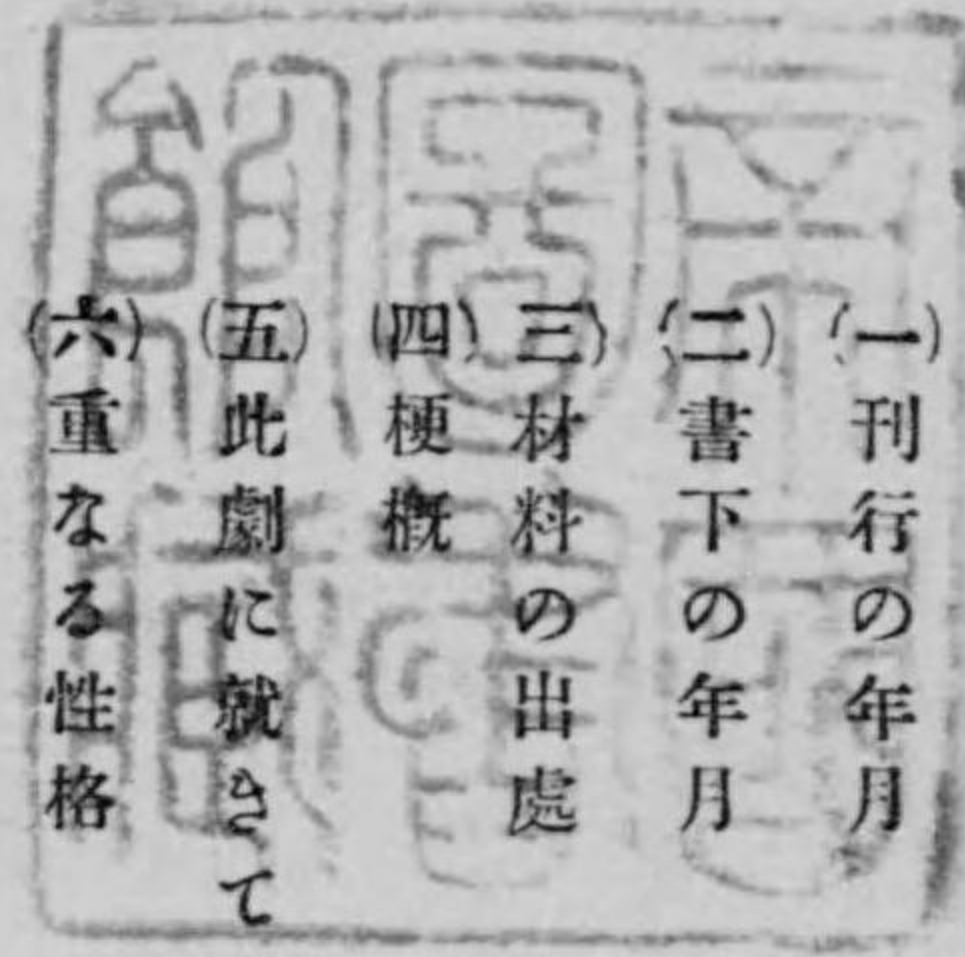
談」をも参考したり。

明治四十年六月

戸澤姑射

ジュリアス、シーザーの悲劇解説

目次



(一) 刊行の年月

此脚本は、一六、二三年の全集第一フォリオ版の刊行迄單行本として現は

ることなかりき、即ち此脚本には所謂クォート版なるものなかりしなり、序ながら第一フリオ版の刊行を以て初めて世に現れ(書冊の形にて)たる脚本は十八種あり、ジュリアスシーザーは即ち此十八種中の一なり。

(二) 書下の年月

書下の年月は精確なる断言を下すこと能はず、然れども二三の記録を参照し、又此脚本中の文句に關する諸研究の結果、一六〇〇年若くは一六〇一年に於て書下されたりとの臆説は、比較的多数の學者の所信なるが如し、要するに此脚本は「ハムレット」より以前に書下され、而かも「ハムレット」との距離は甚だ短小なるが如しといふ。

(三) 材料の出處

沙翁が羅馬に關する劇は都合三種あり、ジュリアスシーザー「アントニー、エンド、クレオパトラ」及び「コリオラナス」是なり、而して此三種の脚本は、何れも其材料をプラタークの傳記より取れり、精しく云へばサー・トーマス・ノースがプラタークの英譯より取れり、云ふ迄もなくプラタークが英雄傳は、紀元第一世紀に希臘語にて編せられたるものなるが、此英譯の初めて顯れたるは、右のトーマス・ノースが譯稿にして、一五七九年に出版せられたり、沙翁は此英譯を研究せる者の如く、ジュリアスシーザーを書下すに當つては、殊に該譯書中のシーザー傳、ブルータス傳、及びアントニー傳を研究し、凡ての脚色人物事變等悉く其中より出て、殆んど少しも己が想像と

創造とを用ひたる形跡なきは、沙翁が平生の用意とは大に異なる所あり、思ふに沙翁はプラタークの傳記を材料とせる場合には、事實は想像よりも奇にして且つ眞なることを認め、同時に了解あり同情ある此古今獨歩の傳記家が描寫の筆を尊重したるならむかされば、ジュリアス・シーザー中の人物科白事變等は、一々典據をプラタークに有し、一も作者が空想に依つて作り出でたる所なし、然れども記憶せよ事實を曲ぐる事なく、記録に違ふことなく空想に頼ることなくして、一偏の劇を脚色するは、却つて至難の業なることを、然るに沙翁が羅馬劇は如何、獨逸の沙翁學者ゲルフィナスは評して曰く、沙翁が大才は記録の事實に拘泥せず、己が空想を以て創造せる時に尤も能く發揮せらるゝか、或は記録を有の儘に使用する時に尤も能く發揮せらるゝか、吾人は惑はざるを得ずと、即ち知る沙翁が、ジュリ

ウス・シーザーは沙翁が空想の創造を籍らずして、而かも沙翁が大才の尤も能く發揮せられたるものなることを、

沙翁は只だ作劇の必要上、年月と場所とを少しく隨意に変更したる所あり、然れどもこは紛糾せる大事變を、五幕の舞臺上に縮むるの大技術を施行する上に於ては、誠に止むを得ざるの變更なりとす、又餘りにノースが英譯を遵奉せるの結果、ノースが誤譯を其まゝに誤れる箇所ありといふ、但しそは何れも些細なる誤謬にして、人名の綴字法を誤れりとか、若くはシーザーが莊園の實はタイパー河の彼方の岸にあるを此方の岸にあるやうに思違へりとかいへるに過ぎず。

(四) 梗概

羅馬共和政の基礎漸う搖ぎて、獨立自由の精神地を拂はむとし、人民は動もすれば王政の昔を思ひ、專制の君主を戴かむとするの心あり、此時に當つて古今の偉人ジュリアス、シーザーは顯れたり、征戰征馬の功を積み新領土を開き新附の民を増す毎に、人民の彼に對する崇拜は次第に増し來れり、最後に彼は己が政敵ポムペーの子息等を西班牙の地に擊破して凱旋せるが、此日羅馬の市民等は此凱旋の行列を見物せむとて、業を休み衣裳を飾り、街頭に徘徊するを、平民の取締役たる保民官トリブーン二人現れ出て、市民を罵り、シーザー崇拜の謂れなきを暗示し、同じく羅馬の偉人にして、而かもシーザーが勢力を得る以前迄は、市民が崇拜の中心たりし大ポムペーの子息等を、破つて歸りしシーザーは、謂はゞ羅馬の國敵を平けしにあらず、己が私敵を討ち己が國人を屠りしに過ぎず、之が爲めに羅馬の領土

は少しも擴大せられしにはあらず、之が爲めに一文半錢の價金の羅馬の國庫を富ましめしにもあらず、然るを汝等規定の休日にもあらざるに、業を抛ち、衣を飾つて彷徨するは其意を得ずとて、街頭の群衆を拂ひ、且つ辻々に崇拜者が新設せる彫像に月桂冠若くは王冠など冠せたるを見附次第に顛倒す、第一幕第一場は此の如くにして開かれたり、これにて當時の羅馬平民の特性と時代の狀況とは、讀者の眼前に略ぼ髣髴たりしならむ。場面は變じて同じく羅馬街頭の廣場となりぬ、同日の事なりしが、凱旋せるシーザーは、其妻カルパニア、アントニー、ブルータス、カツシアス、カスカ等を従ひ、折しも羅馬の例祭ル、バール、カールの祭日に當りしかば、吉例の競走を執行し、そを見物せむとて、嚴めしき行列にて練出てたり、時に見物の賣卜者の群衆の中より一人の賣卜者あり、大聲を發してシーザーに

向ひ、三月望の日を戒心せよと告ぐ、シーザ早くも之を耳にし、件の賣ト者を召して凝視せしが、こは狂人なりとて退け、其まゝ競走の場を指して過行けり。此時此行列の中より、列を離れて後に留まりし者二人あり、一はブルータス、他はカツシアスなりき、而してカツシアスは好機逸す可からずとなし、ブルータスを己が陰謀に加盟せしむる爲めの大問答を開始せり、カツシアスが陰謀とは何ぞや、曰く、シーザ、殺害の大陰謀なり、此陰謀の成就是必ずしもブルータスの加盟を必要とせず、而かもカツシアスのブルータスが加盟を望むこと爾かく大なるの理由は、カツシアス等の徒黨は、縦令此陰謀の成就是難しとせざるも、成就後に於ける世間の同情と承認とを求むるの甚だ困難なるべきに、世間の尊崇を一身に集むる君子、人ブルータスを其首に戴かば、世間は必ず此陰謀を非議せず、却つて一意

國家の福祉を思ふの念に基けりとなすならむとの考慮に出でしなり、實にや、カツシアスは時勢を知り、事務を知るの俊傑なり、三軍を指麾するの將才と、一黨を統ぶるの吏才とを有せり、然れども、其德望は甚だ高からず、殊に日頃シーザの嫌惡者を以て目されたり、此の如き首領を戴ける一味徒黨が、シーザ殺害を決行せる後の世間の同情は何くに越くべきか、何人と無も推測するに難からず、之に反して、ブルータスは、渾身國家を思ひ、自由を尊び、正義人道を重んじ、己の德を磨くに腐心するの外、何物もあらざるの君子なり、加之日來よりしてシーザとは斷金の交も管ならぬ間なり、さればブルータス一人の加盟はカツシアスが陰謀をして千鈞の重みを増さしむるに足るべきは日を觀るよりも明なり、然れどもブルータスは一點不正不義を容れざるの君子なり、又シーザと相愛すること

兄弟の如き義人なり、此の如き義人君子を此險謀に加入せしむるの困難は言語に絶せりといふべし。而かもカツシアスは遂に此困難に打勝ちたり、彼は先づブルータスの長所にして弱點たる、國家の福祉の爲めには何かカッシアスが事をも省みざる愛國心、自由を尊重し專制を嫌惡するの念、別し誘惑手段は大義親を滅す的の義心に附け込み、今日此頃の國家の趨勢を談じ、稍もすれば共和政變じて君主政となり、自由去つて專制來らむとするの傾向を指摘し、羅馬の一市民に過ぎざる、他の平等の一人間に過ぎざるシーザが人間以上の勢力を占め、人民將た之を推して帝王たらしめむの意志あるを慨し、婉曲にして痛切なる詭辯を弄し、巧みにブルータスが正直なる心中を攪亂するに、ブルータスはさらでだに内心既にシーザが王位を窺視するの野心あるを疑ひ、國家と自由とを思ふの念と親

友を愛するの情とが、胸中に無言の戰爭を挑みつゝあるの折なりしかば、少なからずカッシアスの言に動かされ、よし此儀に就きては更に後日を期して懇談する所あらむと云ひ居る所へ、シーザが行列は既に祭儀の競走を終つて歸り來れり、然るに此時のシーザは顔色蒼白額上に忿懣の皺を湛へたる氣色、只事ならず見えしが、それにも拘らず、遙かにカッシアスの姿を望見し、予は此の如く容姿削瘦せる男兒を厭ふ、若し世に恐るべき人物ありとせばカッシアス如きは其尤なる者なりとの語あり、行列は間もなく通過せり、ブルータス、カッシアスの兩人は前の如く後に残りしが、行列中の一人カスカを引留め、競走の祭儀執行中何事か起らざりしやを問ひ、殊に三度大勢の叫聲を聞きしが、彼の叫聲は何を意味せしやを問ふに、皮肉なるカスカは祭儀執行中アントニー、シーザの前に進み出

て、三度王冠を捧げしが、シーザーは三度之を退けたり、之を見たる人民は狂喜して其度毎に爾かく歡呼の聲を擧げたるなり、然れどもシーザーは三度之を退けながらも、内心は甚だ之を退くるを好まず、實は早速にも之を受けたきを、追がに表面だけは之を拒みしなり、然るに人民は案外にもシーザーが辭退を見て爾かく狂喜せしを見、心中大に平かならず、遂に持病の癲癇を起して卒倒したりき、今彼が顔色の常ならざるは即ち之が爲めのみと冷笑を浮べて物語れり、三人はこれにて各別れ、に歸途に就けり。

夜間の怪

第三場は三月十四日の夜間(即ちシーザー殺害の前夜)雷電風雨の中羅

異

馬の街上にてカスカとシセロとの邂逅を以て始め、彼等は

今夜の暴風雨に伴ふ不思議の數々を列擧して相驚けり、或は火を雨らす

嵐、或は其手に火焰を發てども少しも焦爛することなき不思議の奴隸、或は議事廳附近に彷徨ひし獅子、或は全身焔に包まれたる一群の男子、此等の怪異は抑も何の兆ならむと、且つは恐れ且つは怪むこと暫時にしてシセロは去れり、後に残るカスカは、間もなく又カツシアスの來るに邂逅し、又此等の怪異を物語るに、カツシアスは平然として、こは異とするに足らず、シーザーが天下を奪ふの野心あるを、天神の告げ給ふに過ぎずとて、例の辯才を弄して次第にカスカの心を動かし、遂に己はシーザー殺害の目的を達せむが爲め一味徒黨を糾合し、現に今夜ポムペイ紀念の劇場にて會合し、此暗夜に乗じて種々の手筈を議する筈なるよしを告げ、首尾克くカスカをも徒黨の一人となすを得たり、此時恰かも徒黨の一人シンナがカツシアスの行衛を尋ね來るに會し、徒黨の面々既に彼の劇場に參集し

カッシアスの来るを待ち居るを知る第一幕はこれにて終る

同夜既に曉近くなりぬる時の事なり、ブルータスは一度カッシアスの言に動かされてより、國家を思ふの念に、情緒亂れて麻の如く、寢に就けども眠を爲すを得ず、遂に臥蓐を出て、庭園を徜徉しながら、今は彼のシーザーが一身を國家の爲めに犠牲となすの止むを得ざるべきを獨語しつゝある折柄、家僮出來りて、數通の密書を前に置き、書齋の窓に投入れありし由を告ぐ、直ちに披見すれば、何れも國家の急を救ひ、シーザーを除かざるべからざる山を陳じ、之が任に當る者は、ブルータスを除きて他に其人なき赴を切言せり、此等の密書は實は何れもカッシアスが苦計より出來りし賈書なれども、ざりとは思ひも寄らぬブルータスは、之が爲め益す決心の臍を固めたる折も、折家僮又出來りて、只今カッシアスを先頭に五七

人の人々、何れも面部を包み忍びやかに扮打ちたるが、面唔を得たしとして尋ね來れる由を告ぐ、ブルータスはさてはカッシアスが一味徒黨の者ならむとて早速之を引見す、其結果忽ちブルータスは徒黨の首領となれり、而して明三月十五日を以て、議事廳内にて、シーザーを一舉に殺害なさむとの約を訂せり、時にカッシアスはシーザーと同時に彼が腹心のアントニイをも殺害せむと云出でしが、ブルータスは頑として聽かず、アントニイはシーザーが手足なり、シーザーはアントニイが頭なり、既に頭を斬らば、手足は自ら枯死せむのみ、且つや頭を斬つて又手足を撻ぐは酷なり、大義を唱ふる者の爲す可からざる所なりと稱す、カッシアス密かに嗟嘆して曰く、後日國家の禍を爲すものは必ずアントニイならむと、然れどもブルータスの意志動かす可からざるを知りて遂に黙せり、さて一同はこれに

て暇を告げ明朝の再會を約して出去りしが、之と入替りに、ブルターズが妻ポーシアは現れ出てたり。

ポーシア
が苦衷

ポーシアは夫ブルターズが此頃の素振日頃に異なれるを大に異み且つ悲み居たりしが、此夜も夜半より夫の姿の床中に見えざるより、其處此處と尋ねて遂に今しも此處に尋ね至れるなり、さてブルターズが今日此頃の妻に對する仕打を難じ、こは必ず我夫には大なる心配を有するならむ、妾も羅馬の名士カトーが女と生れブルターズが妻とも云はるゝ女なり、妻たるの權利として夫が心中の秘密を知らずは止まじ、女性なりとて夫の秘密を守れぬ程のか弱きものと思はせ給ふか、否な妾は自ら我身の忍耐力を驗したり、即ち自ら我股を傷け見事其痛苦に堪ふるを得たり、か程の心中を哀れと思さば、安んじて御秘密を打明

けさせ給へ、且つや只今覆面せる五七人の丈夫が此處に忍び來られしを知れり、如何に〜と退引ならぬ手詰の談判に、ブルターズ初めは兎や角と云紛らさむとせしが、遂に包み切れぬを知り、然らば後刻巨細に心中の秘密を打明けむ、かほどの賢婦を妻とせる身の、我も汝に耻かしからぬ行ひせてやあらむと告げて此場は閉されぬ。

さて三月十四日の夜も明け放れて早や三月望の日の朝ともなりぬ、シーザは例の通り議事廳へ出頭せむとするを、妻のカルパーニア力争して之を制せむとす、其故は昨夜の暴風雨中に現れたる様々の怪異は、日頃かゝる事に無頓着なる彼女をして、俄かに神経家たらしめ、こは必ず夫の身の上の大事を天の告ぐるものなりと信じたるなり、シーザも初めは無下に之を退けたりしが、彼女の懇請切なるを見、且つ恐らくは自身にも

幾分不安の念を感じたるらしく、然らばカルパーニアの心を安んぜむが爲め、枉げて今日の出應は思ひ留まるべき由を云ひも果てず、徒黨の一人デシアスなる者豫てかゝる事もあらむと思ひ、如何なる事ありとも必ず議事廳へ誘ひ出さむとの覺悟にて尋ね至れるに會す、シーザ乃ち好機なれば、今日は出應せざるべき旨他の議事員へ傳言を依頼する旨を語り、デシアスが其理由を問ふに及び、議事員等へは敢て其理由を云ふを要せず、然れどもデシアス一人への内密の告白なりとて、妻カルパーニアが昨夜見たるといふ惡夢の顛末を物語り、妻は此惡夢を心に懸け、強いて今日の出應を思留らむことを乞うて止まざる由を告ぐ、デシアスかくと聞きながら、と打笑ひ、其夢こそは却つて吉夢なれとて、巧妙なる夢判断を爲し、且つ議事員等は今日を以てシーザに王位を贈るの議あり、然れど

も今日御出應なきに於ては、彼等の心とても如何に變ずるや遂に圖り難ければ、是非に出應あるべきよしを勸む、シーザ此に於て遂に又心を翻し、妻亦強いて争はず、聽てブルータスを始めとし、徒黨の重なるもの數人出應の途次シーザを同行せむとて來り會するあり、シーザ今は喜色滿面に溢れ、いとも満足なる態度を以て、一瞬時の後には、己を刺さむとする刺客等と相睦み、つゝ議事廳指して出往きぬるぞ、思へばシーザが爲めには、口惜しさの限りなりける。

シーザ 此一行が議事廳の堂へ昇らむとする時一人の豫言者あり、の殺害 密かに此陰謀を告ぐる爲めに調ひ來れる建白書をシーザに奉り、即座に一讀を懇願せしが、シーザは己が一身に關する一大事なりと聞き、我が一身に關する建白書ならば、最後に閱讀すべしと退けて其

の儘登壇せり。豫ての手筈に従ひ徒黨等は議事の劈頭其一人メテラス、シンバーをして、其舎兄が此程追放の所罰を受けたるを、如何にもして赦免あらむことの請願を爲さしむ。シンバーはシーザーの座側に跪き、三拜九拜して憫を乞しが、シーザーは頑として聽かず、自ら譬ふるに北極星の萬古不動の姿を以てし、驕慢無比の言を吐く、引續いてブルータス、カツシアス、シンナ、デシマス、カスカ等同じくシーザーの傍に詰め懸け、シンバーが爲めに各哀願する所あり、最後にカスカは此上は腕力を以て請願せむとて、先づ一刀をシーザーの頸に加ふ、之を合圖に徒黨の面々滅多切に切り立て、最後にブルータス留めを刺す、其時シーザー眼を開き、ブルータス、汝もかの一言を此世の名残とし、満身に三十三ヶ所の刀痕を負うて、ポンペイが肖像の臺下に瞑目せり。それより徒黨の面々は立騒ぐ群衆を制し、事

の次第を演説し、自由は蘇生れり、羅馬は救はれたり、と絶叫す、此時彼のアントニーはブルータスの前に恭く進出て、以後はブルータスが味方として世に立たむことを約し、只だ従來のシーザーが恩顧に酬ゆる爲め、シーザーが屍骸を引取り葬送を營むの許可と、一場の棺前演説を爲すの許可とを乞ふ、此時もカツシアスは此棺前演説の甚だ危険なるべきを慮り、之を許可せざるやうブルータスに注意せしが、アントニーが人となりを疑ふべく餘りに君子なるブルータスは、カツシアスが諫めを退け、アントニーが請求に一も二もなく應じたり、只だアントニーが棺前演説を爲すべき場處を指定し、且つ初めに先づブルータス自身登場して一場の演説を爲し、アントニーが棺前演説は、ブルータスが許可を受けたるものなる由を説明かすべき旨の條件を附したり。

ブルータス 場面變ればブルータス、アントニー兩士が大演説の場とな
 スが演説 りぬ先づブルータス登壇して、シーザー殺害の大義名分を説
 き、彼ブルータスはシーザーと斷金の交を訂せる間柄ながら、私交を以て
 公道を制すべからず、シーザー既に王位を視ふの野心ありて明なり、羅馬
 の共和政を覆し、國家の自由を奪はむ者はシーザーなり、此に於てか所謂
 大義親を滅ぼすの心を以てシーザーを殺害せり、彼が寵遇には、涙を捧げ、
 彼が武運には、喜びを捧げ、勇氣には、尊敬を捧げ、さて、彼が野心には、死を捧
 げたる由を説けり、聽衆は一應此説に服し、ブルータス等が此度の所業は、
 實に其當を得たる由を云ひ、ブルータスに向ひ感謝の意を表せり、然れ共
 ブルータスが演説は飽くまでブルータスが人となりを表白せり、即ち彼
 は此演説に於て一意理と義とを説けり、勿論理義に明なる識者に向つて

の演説ならば、それにて十分なり、然るに、聽衆は一般の人民なり、彼等は理
 義に傾聽することあり、然れども、理義に動かさるゝことなき、賤民なり、彼
 等を動かさむと欲せば、彼等の感情を刺戟せざる可からず、アントニーは
 此邊の人情に精通する老滑漢なり、故に彼一度ブルータスに續きて登壇
 するや、飽く迄彼等の感情を對手として其詭辨を弄したり、彼は先づブル
 ータスの高德を稱讚しながら、シーザーが一個人として朋友に對し信義
 に厚かりし由を云ひ、又これまで度々の遠征に新附の地を開き、敵國の捕
 虜を伴ひ還り、莫大の贖回金を得、悉く之を國庫に藏め、以て羅馬の國家を
 して富裕ならしめし事實、又一年羅馬の貧民等飢渴に泣きし時、シーザー
 も共に泣きたる事實、さては去んぬるルバカルの祭日に、アントニーが
 三度捧げたる王冠を三度退けたる事實を陳じ、非望野心は此の如き人の

胸中に湧かざるべきを斷じ、然れどもブルータスはシーザー野心を抱けり、と云はれたり、而してかく云はるゝブルータスは當代の君子なり云々の頗る皮肉なる言を弄し、それにて既に聽衆の心を動かさし置き、さて一枚の紙片を取出し之を示して曰く、是れシーザーが羅馬の民衆

アントニ

一が演説

へ萬一の場合を慮り、兼ねて調製し置きたる遺言狀なり、此遺言狀の中には、彼が汝等人民を如何ばかり愛し如何ばかり常に念頭に懸け居たるかを知るべき文言あり、然れども予は今之を汝等に讀み聞かすこと能はず、何となれば汝等は石にもあらず木にもあらざるに、かゝる難有き遺言を聞かば、汝等の血は直ちに沸騰し、而して、當代の義人君子たるブルータス一輩に向ひ、如何なる舉動を爲すやも測られざればなり、との如くにして飽くまで彼等の好奇心を挑發し、さて群衆は之が爲めにど

よめき立ち、是非共其の遺言を讀み聞かせよと迫るに及び、此遺言の一條を口走りたるは、返すくも予が過失なり、然れども今は悔ゆとも及ばず、汝等がさばかりの切望ももだし難ければ、此上は心ならずも讀聞かすに就き、シーザーが屍骸の周圍に立ち、先づ此難有き遺言の主が死様を見よと、昇かせ來りたる屍骸の傍に立ち、被服の上より血を印せる三十三の刀痕を示し、ブルータス等が殺害の當時の卑怯なる舉動を物語り、シーザーに對する同情を十分に惹起したる上、更に被服を剝ぎて刀痕の満ちたる皮膚を覗はしめ、群衆が譯もなく熱し來れる所へ、彼の遺言狀を讀聞かせ、其遺言に依ればシーザーが遺産の全部は始んど羅馬の市民全軀へ與ふる由を知るに及び、既に熱せる市民は早や狂し來りて、此上はブルータス一味の叛徒を捕ひ、其住家を焼き拂へと叫びつゝ、狂奔し、忽ちブルータ

ス、等を敵とする市民の一擧は形作られたり。

此結果としてブルータス等は羅馬に留まることが能はず、各身を以て國外に遁れたり、精しく云へばブルータスは希臘のマセドニアへ、カツシアスは小亞細亞のシリアへ遁れたり。然れども約一年半の後、ブルータスは兵を率ゐてマセドニアに渡り、其處にてブルータスと相合せり。此時に當つて羅馬の本國にては、アントニー、レピダス及びジュリアス、シーザーの甥オクタビアス、シーザーの三人政治形成せられ、此三人羅馬の領土を三分して各其一を有し、專横なる合議政を行ひ居しが、近頃ブルータス、カツシアス等其勢を併せて羅馬に攻め上らむとすとの注進に接し、こは容易ならずと直ちに兵を募り隊を整ひて羅馬を發し、追討の爲めマセドニアのヒキリツビ迄進軍せり。

ブルータス
とカツシア
スとの争論

さる程にブルータス、カツシアスの兩雄は、久し振にて顔と合せしが、彼等が其時第一に替はしたる摺袂は、久澗を叙する親愛の辭にあらずして、相互の非道を責むる矯激の言にてありき。先づカツシアスはブルータスが、其部下の一羅馬人が土人より賄賂を取りたりとの故に之を嚴罰に附し、剩へカツシアスが仲裁の書翰をも棄て、顧みざるの無情を憤り、かゝる境遇の下に在つて部下の言動に干渉し、些々たる細瑾をも寛假せざるは寧ろ迂濶なりと斷言すれば、君子一點張のブルータスは、如何なる事情の下にも、一點の不正を容赦せざるのみならず、却つてカツシアスが辯解の書翰を認め、仲裁を試みむとしたるの非を鳴らし、且つ一時軍用金の調達を依頼したるを、すげなくカツシアスが斷りたる無情と、カツシアス自身も官を賣りたるの嫌疑ある

を責め、果ては雙方聲激し言高まり、如何なる終結を見るに至るやを危ぶましめしが、遂に雙方其胸中の鬱結を吐出したるの結果、互に我が過言を悔い、和睦して再び舊の如き友情を誘ひ出すを得たり、此争論の場は、コルリツヂが沙翁の天才の尤も能く發揚せられたる所と極言賞讃せる有名なる一場なり、此和睦の成りたる後の事なりき、ブルータスは羅馬に残し置たざる其妻ボーシアが今日此頃の天下の形勢を憂ひ、夫の身の上を案ずるの餘り、炭火を吞んで自殺せりとの密報に接せる由を告ぐ、カツシアス之を聞き、かゝる折とも知らず、ブルータスに對して惡言罵言を放ちたるの、重々過てるを悔ゆ、されどもさてあるべきならねば、それよりヒ井リツビに陣せるアントニー等の軍に對する戰略を評議せしが、カツシアスは此地に留まつて兵力を休養し、敵をして我に來らしめ逸を以て勞を

討つの利なるを説き、ブルータスは寧ろ我より進撃するの利なるを主張して止まず、遂にブルータスの説に従ひ、明早朝より直ちに進發し、フキリツビに向ふべきを約して相別れたり

シーザーの亡靈

此夜カツシアス去れるの後、ブルータスは其童僕の一人を彈じながら何時しか華胥の郷に入れり、夜は既に五更に垂んとせり、然れどもブルータスは眠を爲すこと能はず、讀みさしの一書を取つて繙きつゝある際、燈火の次第に暗うなるに、ふと目を舉れば、何物とも知れず朦朧と現れ出でたるものあり、神か天使か抑も魔か、形は正しく故シーザーの顔貌なり、何故此處へ現れ出でしやと問へば、フキリツビの原頭にて、汝と相見むことを告げむが爲めに來りたりと、云ふかと思へば、かき消す如く

行衛も知らずなりぬるぞ不思議なりける、それより間もなく夜も明けぬればカツシアスを促し立て、議の如くフキリツビ指して進發せり

フキリツビ

かくてブルータス、カツシアスの軍はアントニー、オクタビ

の戦

アの軍をマセドニアのヒキリツビに攻撃せり。此一戦は彼

等の運命の依つて以て決すべき一大決戦なれば、ブルータスとカツシアスと互に今生の訣別を爲したる上、ブルータスはオクタビアス軍に當り、カツシアスはアントニー軍に當り、同時に戦闘を開始せり。然るにカツシアスは此度の攻撃を以て始めより不利なりとし、心ならずもブルータスの言ふがまゝに任せての事にてはあり、且つ進軍の途上我軍旗の上に棲りたる靈鷹の追へども去ることなかりしが、今朝に至り俄かに去つて其行く所を知らず、剩へ我軍の頭上には不吉の鴉群來りて高く翱翔するを

見て、是れ敗軍の兆なりとの疑念をさへ起しければ、意氣既に平生の如くならず、兩軍相合するに及んで遂に敗衄し退却せり。顧みれば今は従ふ者さへ僅に二三に過ぎず、漸う一丘陵の下に至り、歩を留めて望見すれば、彼方に一隊の軍兵あり、敵か味方か定かならず、即ちチ、ニアスなる一將を遣して偵察せしめ、又ビンダラスなる一人の奴隸をして丘上に登り、チ、ニアスの行衛を望見し、一々之を報道せしめしが、聽てチ、ニアスは一隊の騎兵の圍む所となり、忽ち敵に生擒せられたりと、ビンダラスの報ずるを聞き、最早是迄なりと覺悟を極め、ビンダラスをして己が劍一嘗つてシーザを刺したる其劍一を執て直立せしめ、自ら走りかゝつて胸を貫き、其まゝ敢なき最期を遂げたるぞ、思へば大早計の至りなりける。然るにビンダラスが丘上より望見したる一隊の騎兵は、ブルータスが部

下の將士メツサラ等にして、ブルータスは見事にオクタビアスを敗りたれば、其報告を兼ねて月桂冠をカツシアスに贈らむが爲め、此等の將士を遣し、なるが途上チ、ニアスに遇ひたれば、彼等は馬を下り相近づきて相祝せしを、ビンダラスは一圖にチ、ニアスが敵の捕虜となれりと誤解せしなりけり、されば間もなくチ、ニアスはメツサラ等と共に、早く此吉報をカツシアスに告げむものと、勇氣百倍して歸り來りしに、意外にもカツシアスは既に自盡して在らざるを見、遂に己れも同じ刃に依つて自害せり。メツサラは取敢ず此顛末をブルータスに報告せむと出行さしが、程なくブルータスは入來り、此場の悲劇を見て長嘆息すること霎時なりしが、さてあるべきならねば、應て戰場へと引還し、其口再戦を試みしに脆くも敗北し、討漏されの將士と共に暫しは落延しが、早や盡き果てし武運の末

を思ひ、殊にはサルヂスにて一度見たるシーザーの幽霊、又もや約の如く、フネリビにて現れたるは、重ね／＼運命の盡くる所と觀念し、遂にカツシアスの最期に倣ひ、自盡して果つる所、英雄の末路、悲壯を極む、間もなく敵將アントニー、オクタビアス等來り會し、ブルータスが眞に憂世愛國の羅馬人なるを公言し、敵ながら彼が一代の行爲は公明正大、些の邪曲なき由を讚嘆し、葬送萬端、鄭重に執行すべき由を述べて、此悲劇は終れり。

（五）此劇に對する一二三評家の言

初年の作に於ては、往々文章は思想に纏ふ爲めの衣服―苦心して裝飾を施せる衣服の觀あり、時に思想は其纏へる衣服に堪へざることすらありしが、中年の作は、思想と文章との間に完全なる平衡を保ち、些の過不

及なし、ジュリアス、シーザーは、即ち、此標本なり、又晩年の作に於ては、文章よりも思想の過重を來し、粗末なる衣服の中に、偉大なる思想の包まるゝを見るに至れり——ダウデン氏

「ジュリアス、シーザー」等の劇に於ては、外觀上正史の事實を嚴守して、些の技術を用ひざるが如しと雖も實は、其中にこそ非凡なる技術は、潜ひなれ、廣漠たる史的事實の中より、過たず其詩的急處を捉ひ、之を少しも變更せず、料理するの手加減を知るは沙翁なり、されば此等の劇を讀めば、古羅馬の社會的生活の状態は其墳墓の中より起し來られ、戯曲的技能の最大自由と雄大とを以て吾人の眼前に展開せられ、ブラタイクが英雄傳中の人物は、雄辨なる詩神の力に由つて躍々として現れ出づるを見む——
シレーゲル

予は思ふ、ブラタイクの英雄傳を手にしつゝ、沙翁を讀むより興味多きはなし、沙翁は非常なる忠實を以て史的事實に縋れり——茲に畫布カンバの上に描かれたる五六の人物畫あり、輪廓は明瞭なり、色は強し、然れども其コムポジションに何等の技術なく、配合なく、光もなく、影もなく、全躰に乾からびたるが如き趣あり、是れ歴史家ブラタイクの描きたる繪畫なり、更に翻つて詩人沙翁の描きたる畫面を見んか、此處には前者と同一の人物畫あり、然れどもこれは生けるが如き觀あり、且つ彼等が活動しつゝある所の周圍の凡ての光景と調和せり、此に於て吾人は自然の眞事實ワクタと技術ギョウ（一層上手の自然なるの理想カサ）とを、一目に並べて見渡すことを得！

——ナイト

ドクトル、フワーニバルは、ジュリアス、シーザーを以て、ハムレット及び

「ミージュニア、フラーア、ミージュニア」と共に過大負擔劇(Under-Burden-Fail-ing Group)なる名稱の下に一括せり、其意此劇の主人公ブルータスが其性格に適合せざる國家の大事を負擔し、失敗に終れること他の二劇の主人公と相類似せるを以てなり。

ダウデン氏も亦此劇を以て「ハムレット」並立せしめて曰く、二者共に情よりも寧ろ想の劇なり、何れも正廉潔白なる性格が、或る弱點の爲めに失敗に終る狀況を描出せり、ブルータスが身の上にもハムレットが身の上にも、等しく彼等が遂行に堪へざる過大の負擔は課せられたり、然れどもブルータスもハムレットも之を實行するには其性質不適當なり、而かも百難を排して之が實行に當りたり、かくして此二悲劇は起れり云々。

(五) 重なる性格に就きて

シーザーは所詮此劇の主人公にあらず、寧ろ眞の主人公ブルータスが性格を明瞭ならしめむが爲めに用ひられたる道具の觀あり、従つてシーザーが性格の描寫は甚だ不完全なり、吾人は本劇に現れたるシーザーを以て、羅馬の英雄シーザーと思惟すること能はずとは、多數の評家の口にする所なり、ハズリツト曰く、此劇の主人公(註)は屢ば妄りに浮誇的なる、而して寧ろ術學的なる言辭を弄すれども何事をも爲さず、否な爲すべき何事をも有せずと、ハドソン曰く、シーザーは此劇中に於て少しもシーザーたらず、彼が口にせる言辭は、一も歴史上のシーザーの特性を發揮せりとは思はれず、概して之を云へば、純粹の戲書に過ぎ

ずと、以て此劇のシーザーが注目するに足らざるを知るに足らむ。

ブルース 此劇中にて尤も能く描かれたる性格はブルースなり、彼は

タス 志操堅固なる哲學者にして又熱烈なる愛國者なり、正廉潔白、義

の爲めには一身を献じて省みざるの君子なり、然れども彼は政治家にはあらず、彼は理想家空想家なり、然れども實際的の知慮には甚だ貧なり、所詮彼は書籍の人にして世才の人にあらず、彼が主義は高潔なり、彼が目的とする所は實に報國憂世の誠心より出づ、然れども其主義も目的も要するに空中樓閣たるに過ぎず、故に彼は容易くカツシアスが道具と使用せられ、大義親を滅す的の考より、恩義あるシーザーを殺害し、羅馬の共和政を古へに恢復せんと圖りしが、遂に失敗に終れり、ダウデン氏が彼を以てハムレットの性格に類似せりとなせるは一に此に在り、然れどもブルース

タスはハムレットよりも巨人なり、否、古今の巨人中に位して決して甚だしき遜色を見ざる英雄たるを失はず、故に吾人は讀終つて英雄の末路の悲壯に注ぐ涙のブルースか身の上にも自つと流れ出るを禁ずる能はず、殊に彼は吾人日本人の頭と胸とを以てするも容易に了解し、感得し得らるゝ性格なり、ハムレットの性格の如き、或はリア王の如き性格は、吾等日本人には容易に了解し、若くは感得し得らるゝ性格にあらず、然れどもブルースの性格は、其王者を排し、民政を重んずるなど、我國の古武士が思ひも懸けざりし主義理想を抱けりしにも拘らず、我國の武士道が尙ほ容易に同情し得べき、従つて容易に了解し得べき性格なるが如し、蓋し正廉潔白、大義親を滅す底の義心と、國家の爲めには一身を献じて悔いざる底の意氣とが、武士道の根本主義と相一致するの致す所ならむか。

カツシ
 アス
 カツシアスはブルータスに比ぶれば、慥に悪人たるを免れず
 然れども其悪たるや、吾人が一般に悪人と稱する階級に入るべ
 き程の悪人にはあらず、只だブルータスに比ぶれば其悪は餘り目立ち過
 ぎて見ゆるの憾みあるに過ぎず、精しく云へば愛憎の感情を有し處世術
 上の方便や解する一、般の男兒が、一般に有する程の汚點を有せしに過ぎ
 ず、即ち彼が悪を解剖すれば、シーザーに對する嫉妬心と、目的を達する爲
 に使用せし一二の詐譎的言行に過ぎず、概して彼は普通人に勝れたる知識と
 道徳を有せりとおぼしく、ブルータスが信用を得又他の徒黨より一大事
 の謀士と立てられたり、殊に世態、人情に通じ、能く事物を洞觀するの明あ
 り、平生沈思黙考の習慣と古今の書籍を涉獵するの癖あり、其體格は、瘦、軀
 長、身、神、經、質、の、鋭、敏、を、表、せ、り、されど神經質の薄志弱行をも併有せるは、常

にブルータスが主張に反對し、後來の禍難を略ぼ豫知しつゝも、遂に己が
 意を枉げて服従し、之が爲め豎子アントニーをして名をなさしめたるの
 一事に徴して明なり、然れども一面彼は膽氣に富み實賤窮行の勇あり、謀
 略に長じ同時に實行の手腕あり、要するに彼はブルータスが空想的なる
 に反して徹頭徹尾實用的の才人なり、換言すれば彼は政治家にして又軍
 將なり、ブルータス程の偉人にあらざるもブルータスよりも複雑せる一
 個の準偉人なりといふを妨げず、吾人は準偉人なりといふ、何となれば彼
 は所詮大將の才にあらざればなり、否な大將の才はあれども大將の重み
 なし、參謀官の才略は直ちに認められむも、大將たるの大器は容易に認め
 られざるなり。

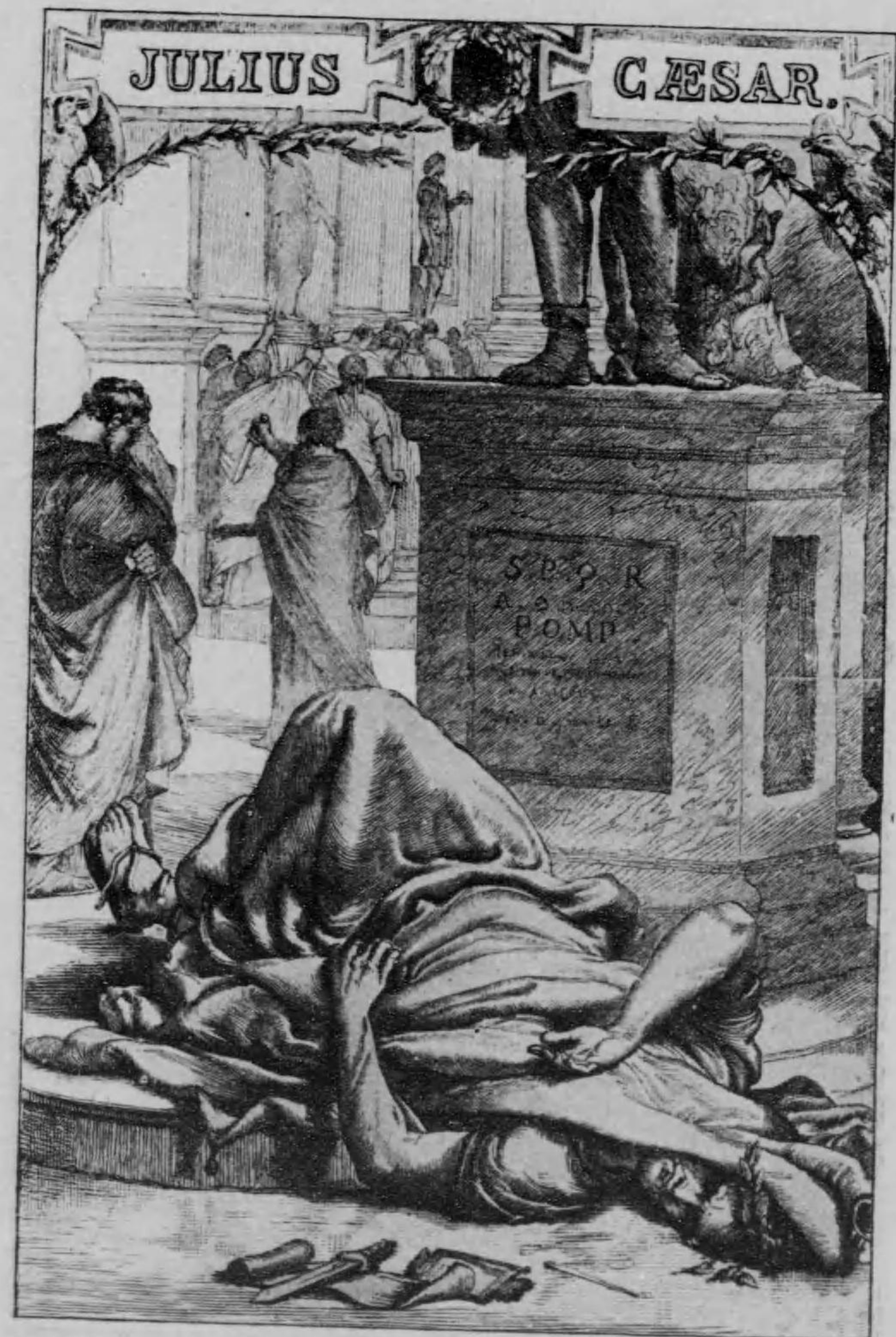
アント
 ニー

アントニーは此劇中の重なる性格の一には相違なけれど

も、要するに後景中^{バックグラウンド}の人物なれば、沙翁も餘り此性格の描寫に力を入れしとは思はれず、只だ第三幕に於ける彼が大演説は、編中の大觀たり、此演説にても知らるゝ如く、彼は好個の戰國策士なり、従つて戰國策士の長短善惡を併有す、只だ奇なるはシーザー討たるゝ迄のアントニーは、酒宴遊興に日を過し、シーザーか幫間としてより外、羅馬の舞台に何等の意味をも有せざるらしかりしが、一朝シーザー殺害の大變に遭遇し、俄かに蹶起して一個の大達物となり了し、大野心と大勇猛心とを奮起し、遂に彼の徒黨を逐ひ羅馬の天下を他のオクタヴィアス等と分有するに至りしにあり、尤も放縱時代のアントニーも、時ありては其鋒銳を現せしこともありしと思はるゝは、カツシアスが、後日天下に禍を爲すものはアントニーならむとの一語にて明なり、然れども結局彼は放縱無主義の一姦雄たるに過ぎざる

べし

(完)





『れ宅歸とつと共者情念れ往れ往』

ジュリアス・シーガー

第一幕

第一場—羅馬 街上

アラビ 往ねく 怠惰者共、とつと、歸宅れ休
 日でもあることか、職人の身で平日に、職
 々の道具も持たず出歩くは、御法度と知
 らぬかヤイ、コリヤ其方は何職ぢや、

アラビ
 フラビウス(保民官即ち平民の保護を以
 て任務と爲す、故に平民に對しては裁
 判權警察權等をも併有し、又一方貴族
 の平民に對する迫害を)マルラス(全登
 場、賤民の群衆と出合ひたる林)

登場人物

ジュリアス・シーガー
 オクタビアス・シーガー
 マーカス・アントニー
 エミリアス・レビダス
 シーセ
 バブリアス
 ホビリアス・レナ
 マーカス・プルタス
 カツシアス
 カス
 トレボニアス
 リガリアス
 デシアス・プルタス
 メテラス・シムパ
 シン
 フラビウス
 マルラス
 アルテミドラス
 實者

議事員
 シーガー死後の羅馬三
 執政
 シーガー殺害に預りた
 る徒黨
 保民官
 クニドスの説辯家

詩人 シン
 ルシニア
 チカト
 メツサ
 小カト
 ヴラムニア
 ヴラムニア
 クラウチア
 クラウチア
 スト
 ダラニア
 ビンダラ
 カルバニア
 ボーシア
 其外議事員市民侍者従者兵士等大勢

羅馬—小亞細亞のサルヂス附近—マセドニアのヒ
 ンリツビ平原

シザイ夫人
 プルタス夫人
 アルタスが那黨若く
 は僕
 アルタス及びカツシ
 アスが味方の將士
 カツシアスが召使ふ奴
 隷

甲 平民 大工職にムりまする。

ラマ スル 然らば大工に定例の革前垂曲尺は如何致したえ、其外行姿は何

事ぢや——して又其方(平民乙)は何職ぢや。

乙 平民 へ、立派なお職人と並んでは、見る陰もない下商賣でムりまする。

ラマ スル イヤ其方が職は何職明白に申立てい。

平 乙 誠に心の底まで安らかな商賣でムりますると申すは底の損じを
繕ふが私の商賣でムりまする。

ラマ スル おどれ横着者、商賣は何ぢや、何職ぢや。

平 乙 お願ひでムりまする、其様に御立腹なされて、御氣根を御減らしな
されますな、餘り御減らしなされますと、私が御繕ひ申上げねばな
りませぬ。

ラマ スル 何を申す、身共が繕ひを致すとは何ぢや憎い奴。

平 乙 イヤサ私が減磨を御修補し申さねばなりませぬ。

ラマ スル さてこそ其方は杏修補職ぢやな、左様か。

平 乙 畏入りました、誠私は革針を以て糊口を致す者、古靴の療治を致す
外科醫でムりまする、靴共が危篤とある時、助け遣すが私の商賣苟に
も靴を御穿きなされる御方なりや、どのやうな立派な御方でも、私の
手細工を御用のなされます。

ア フ ス ビ 乍去、何故其方は今日店を明けた、何故此大勢の先達になつて、街
中を彷徨ひ居る。

平 乙 外でもムりませぬ、大勢の靴を少しづつ、も磨減らさせ、私の商賣を
繁昌致させう爲めてムる。イヤこれは冗談、眞實はシーザー公の御通

行を拜見致し、御凱旋を祝ふ爲め、仕事を休みましてゐる。

ラマ
スル

ヤイ、祝ふとは何を祝ふ、彼シーザーが如何なる國を従へしぞ、此羅馬への家苞いづつに、如何なる敵を捕虜とりこにして、戎車に繋ぎ引來れる（戎車を繋ぎ引き來るは凱旋の習ひにて、新たに屬國を得たるを意味す）ヤイ、汝等は木石同然、無心の物にも劣るぞよ、おゝ、無情殘忍の羅馬の民、早や汝等は、大ボムベイを忘れしか。想へば、汝等が、羅馬の牆壁を攀ぢ、挾間はさまに登り、或は塔、或は窓、さては煙突の頂上へ迄這上り、幼き者を抱きしまゝ、長の日を終日、倦みもせず、大ボムベイの街上を、通行なすを見物せむと、ひしめき騒ぎしも、幾そたび、彼を乗せたる戎車の影の、ちらとだに見ゆるが否、汝等が歡呼の聲は、兩岸の堤に反響して、タイバーの河波も震動ゆぶしならずや。さるを何ぞや、汝等は、今しも晴の衣裳を飾着りしよな、今日をしも臨時の

休日となしたるよな、さてボムベイの子息等をば、討つて還りし者の爲めに（此日、西班牙のマンダに破つて凱旋したるなり）、そが通路に祝賀の花を撒かむとな。ヤイ、往いに居らう、早や、己が自宅へ引取り、神前に額ぬかづいて、此忘恩背徳の行爲わざに、落ち懸らては止むまじき、天罰を逃れむ爲め、罪障消滅の祈禱を致せ。

アフラ
スラ

行けや、御國の民、此の報償ほうばいには、汝等が同輩を打集たぎひ、タイバーの岸に伴たひ行き、悔悟の涙を注ぎ、河底かそこなりし淵瀾ふちの波、堤の頂を洗ふ迄、彼の大河を漲らせよ。

と賤民打萎れたる姿にて一同退場

御覽あれ、彼等賤しき民なれども、道がに心動き、我が非を悟りしか、舌を嚙かんで退散致した。さて此上は貴殿には、カピトルの祠（シユピ）及い

のびミナ1バを祭れる羅馬を指して、其方の道を御出あれ、某は此方の道
の大祠堂にして又議事廳を参ります、若し又此頃市の諸方に建てられたる、シーザ1の彫像
に王冠などが冠せあらば、見附次第に御剃ぎなされい(業を謳歌する
徒黨は彼の彫像を作りて市街の各處に建て、
之を飾るに王冠其他を以てしたりといふ)

ラマ
スル とは又餘り手厳しくはムるまいか、御承知の通り、今日はルバ1カ
ルの祭日でムる(ルバ1カルの祭日は二月十五日にして、羅馬建國の保護
神ルバ1カスを祭る其祠堂はバラチン丘の麓なる洞穴
の中に)

アフラビ 御懸念御無用、何れの彫像なりとも冠などは一切着けさせます
まい、某はこれより参つて、街上の平民共を拂ひます、貴殿も何卒彼
等が群集致すを御覽あらば、御追ひ退けなされませい。漸々生茂るシ
1ザ1が大望の羽翼、先づ此様に撈り取らば、餘り高飛も致すまいが、

此儘に打棄て置かば、九重の天迄翔り揚り、我等民生を見下して、如何
なる潜越の舉動に及ぶべきや、ハテ恐ろしい事ではムらぬか。

と二人退場

第二場 全上 廣小路

舞臺の一隅に祭壇を設け香火を供へ、其傍に一人の賣卜者立ち
居る、其の兩側には人民の群衆、かゝる處へシーザ1、アントニ1
(シーザ1の崇拜者にして、ルバ1カル祭の儀、カルバ1ニア(シ
ズ1)なる競走に出てむ爲めの装束を着け居る)カ、ルバ1ニア(シ
ズ1)の妻、ポーシア(アル1タ)、デシアス(後にシーザ1殺戮に、シセロ
(元老院議官にして)、アル1タス(シーザ1殺戮の首領にして、此劇
(有名なる演説家)、アル1タス(政治家にして、此劇
の主人公)カツシアス、(全)及びカスカ、其外僧侶、議官、旗持、役人、護衛兵

等行列を整ひ樂人を伴ひ奏樂にて登場

ザシ いかにかルバーニア。

カカス ソレ音楽中止よ、シーザー公が物を仰せらるゝ。

と樂人奏樂を中止する

ザシ カルバーニア、居るか。

カカス 我夫には何御用でムりまする。

ザシ 外でもない、これより、アントニーが、走競を致すに就き、其許は誤ら

ず、道筋に立つて居やれ(者一人に其携ふる所の革の紐を以て、騾競し

れたる婦人は、若し妊娠中なれば安産を得、若し子なき婦人なれば此語ありべしといへる傳説あり、カルバーニアはシーザーに嫁して子なき故に)

——又アントニーにも——

ニアント 何事でムる我君。

ザシ 競走の折餘りに早つて、カルバーニアに觸るゝを忘るゝな、故老の

傳説に承る、今日の祭の競走の、革紐に觸るゝ時は、石婦も天賦の不毛を免るゝとかや。

ニアント 必ず失念致しませぬ、シーザー公が、斯くなせとの仰せに、叶はぬ事はムらぬ筈。

ザシ 然らばイザ出立致せ、して儀式は必ず型の如くに執行へ。

と樂人又奏樂を始むる

者賣ト シーザー公に言上致す。

ザシ ヤア余が名を呼ぶは何者。

カカス 何れも靜かに、音楽中止めよ。

と又奏樂を中止する、同時に群衆はさつと兩方に開き、其隙に

り賣ト者の姿見ゆる

ザシ 群衆の中より予を呼ぶは何者ぢや、音楽も壓倒るゝ高聲にて、シ
ザ！と呼ぶ聲を聞き附けしぞ、申したき事あらば申せ、聽聞致さむ。

賣ト 三月十五日を御慎しみあれ。

ザシ さいふは何者ぞ。

アスル 一人の賣ト者が、三月十五日を御慎みあれと言上致しまする。

ザシ 其者を目通りへ進めて面を見せよ。

カカス こりや奴、罷出て、面を上げよ。

と賣ト者進み出る

ザシ 只今は何と申した、最一度申して見よ。

賣ト 三月十五日を御慎みなされませい。



に物見を儀模の走競りよれこ殿スタイルア
る蒙免御は某 しかぬらムはてうら委

ザシ さてこそ、晝間夢を見

る狂人ぢやな、棄て、措
け(トニ賣ト者、ア
ラウ

と喇叭の合圖にて一
同通り過ぎる、只だア
ルータス、カツシアス
の兩人残る

アカ
スツ
シ
より競走の模様を見物
に參らうてはムらぬか

タブル 某は御免蒙る。

アカツシ イヤ何卒御同道なされ。

タブル 某は陰氣の性、アントニーに見らるゝ如き、陽氣活潑の精神を持ちませぬ。此上はカツシマス殿、貴殿の御邪魔を致してはなりませぬ。某はこれにて御別れ申さむ。

とブル去らむとするを、カツシマス呼留めながら

アカツシ ブルタース殿、今日此頃の貴殿の舉動、どうやら某へ對し、以前の御厚誼の様なない。貴殿を慕ふ某を、手馴れぬ馬でも乗る様に、手綱に油断をなされぬ扱ひ。

タブル 思ひ違ひ遊ばされな。某が様子に、何ぞ虚々しい處がムらば、それは某一人の胸の中に、屈托事を藏ひ居る爲めてムる、何を隠さう此程

某が心中は、水火の如き二つの思ひの、狂ふがまゝに任せてムる。元よりこはたゞ、某一人に關はる事なれど、自然言行に表れ出ると見えまする。此の如き次第故、貴殿を始め某を知れる方々には、何卒惡しからず思召下されい。憫むべきブルタースは、心中の争亂故、他人に對する辭儀作法を、たゞ忘れし迄の事、此上の御推量は平に御無用。

アカツシ 果して然らばブルタース殿、某は貴殿の御心中を思ひ違ひて居りました。それ故にこそ、某も胸中に在る一大事を、今迄收め置きました。いやブルタース殿、御尋ね申す事がムる、貴殿には御自分の御眼を以て、御自分の御顔を御覽なされますか。

タブル イヤ、カツシマス殿、他物に反映せば格別、我が眼で我眼は見えませぬ。

アカツシ げに、然るにブルータス殿、貴殿には隠れたる御美しさを、御眼に反映す様な、御鏡を御持ちなされず、夫故御自分の御係を御覽なされぬを、皆々口惜しう存じ居ります。現在心ある羅馬の人々——但し彼の生神同然のシーザー公一人を除き——ブルータス殿の御噂を致し、當代政道の壓抑を嘆つにつけ、何卒ブルータス殿に、御自分を見るの御眼を持たせたいと申し居るを、某が耳に致したことも一度二度ではムりませぬ。

タブスル 一 ハテ某が天賦の資性に、具はりも致さぬものを、強いて見よ探せよと仰せらるゝは、カツシアス殿抑も貴殿は某を、如何なる危険の地へ御誘引あらせられうずる思召てムるな。

アカツシ さればブルータス殿、御聞下され、御自分の御姿は、鏡に映して御

覽あるが早道と存じ、只今某が鏡となつて、貴殿御自分も御承知のない御本性を、有の儘に御覽に入れ申す所存でムる。但しかく申す某の眞心を御疑ひあるな、若し此某が取るにも足らぬ、却間風情なるか、但しは有觸れた世辭追従て誰彼の差別もなく、口先計りの友愛を取結ぶ、輕薄男兒なるか、若し又此某が、妄りに人に諛辭を呈し、忽ちにして二なきものに睦みあひ、忽ちにして誹謗を逞しうするなどの舉動を致し、さては宴會の場などにて、満座の人々に、善惡の見境もなく、悉く友情を契るなどの行爲あるを御認めあらば、いかにも某を危険な奴と思召さるゝも、御恨みには存じませぬ。

此時奥にて喇叭の音と共に喝采の聲聞ゆる

タブスル 一 ハテあの叫び聲は心得ぬ、人民共がシーザーを王位に登さむと

ての騒ぎにては。

アカスツシ　それを御氣遣ひなさるゝか、然らば貴殿はそれを御望みなされぬと見えませぬ。

タプスル　いかにも某は望みませぬ、なれどもシーザー公への、某が友愛は變りませぬ。——さて貴殿には、何故某をかやうにいつまでも御引留めなされませぬ、御申聞の御用は何とてゐる、苟も公益の爲めとあらば、片目に義を見片目に死を見ながらも、平然として之に就きませう、義を愛すること死を懼るゝよりも大なれとは常々某が心願てゐる。

アカスツシ　いかにもブルータス殿、某は貴殿の御容顔を、具さに承知致す如く、貴殿が義に富む御心中をも承知致す、某が只今御耳に入れうずる事と申すも、即ち義故の事てゐる、抑も貴殿に於かせられては、此浮世

を如何思召すか存せぬど、某などは我等同等の人間を、王よ君よと戴き、我身を屈めて生存ふるは、生甲斐もなき事と存じます、某とても自由の民と生れたは、彼シーザーに異なりませぬ、貴殿とても御同様されば同じ穀を食らひ、同じ冬の寒さに堪ふる事、吾人とも彼シーザーと何變りのムらふ、或年の事なりしが、風吹荒び、寒さ身に沁む折からに、タイバーの河水、溢れて岸を洗ふを見て、シーザー傍なる某に向ひ、いかにカッシアス、拙者と共に此怒り狂ふ濁波ウルクの中に跳り入り、彼方の岸迄泳ぎ越さうずる勇氣はなきかとの大言に、某乃ち着たる衣類も脱ぎあへず、躍入りざま、續けよと聲を懸くれば、彼も直ちに跳り入りしが、急流さかまき狂ふ中を、何れも屈竟の腕を揮ひ、互に負けじ魂もて、波を切り水を絶つて突進す、されども目指す岸邊には、まだ程

ありと見ゆる頃、助けよカッシアス、拙者は此まゝ沈み果てむと呼ばはるシ、ザ、呼ばれて某取つて返し、當初我等が大先祖エイネアス(エイネアスはトロイ國の勇士なりしがトロイ燒亡の際其老父アンキセスを負ひ其子と共にトロイを去り其後四方を流浪せしが遂に伊太利のラチアムに留まり羅馬の建設者と稱せらるゝ)が、トロイの市の火災の中より、老いたる父のアンキセスを肩に負うて逃れし如く、疲れ果てたるシ、ザ、を某が肩に懸け、タイバーの濁波の中より救出せし事も、然るに其シ、ザ、が今は生神いさかみと成り濟し、此カッシアスは一賤民、シ、ザ、がかりそめの點頭うなづにも、腰を屈めて再拜致さねばならぬとは、まづた西班牙國滯留中の事なりしが、シ、ザ、熱病に罹りしことあり、惡熱襲ひ來る毎に、彼が震ひ顫さしを某此眼で見ましてゐる、確に彼の生神が震ひ顫さましてゐる、其時の彼が容顏唇は色を失ひ、今一瞥

を與ふれば、世界も爲めに恐れおのゝく彼の雙眼には、生ける光も消え失せて、剩さへ口には呻吟うめきの聲、羅馬の民を誡めて、我が一言一語を忽ゆるがせにせず、手冊に記し留めよと、命令なしたる其舌が、あはれ、チ、ニアス殿(カッシアスの親友)、水を一杯下されいと、年端も行かぬ娘子が、病の床に就きしやうのおろゝ聲、えゝ此様なめゝしい男が、此大千世界に勝誇り、無敵の榮譽はまらを彼の一身に荷ふとは、さて、天道は是か非か、不審の事でゐる。

と奥にて又歡呼の聲、喇叭の音聞ゆる

ダブスル、
「タ、ス、ル」
又も大勢の叫び聲、定めて何ぞシ、ザ、に、重ねて捧げ物を致した故の歡呼でゐらう。

アカスツシ、
音に聞く、ローヅの港の巨像(此巨像は港の入口に跨り船舶は皆な)も

かくやと、世界を股に懸けたるシーザー、それに引かへ、我等小人の哀れさは、彼が股間を彷徨ひて、我から我身に卑屈の墓を掘らむと呪ひ歩く。あゝ人間の運命とても、何時かは我から作り出づるの機は、ムる。同じ人間に生れ落ちて、卑賤の地位に動めくも、其罪我に在つて天にあらざ、ブルータス殿とシーザーと、何處に何、相違のあらむ、シーザーと申す名に、何の秘密がムらう、シーザーと申す名が、貴殿の御名よりも響き高からう理由はムらぬ、二つの名を並べて、紙に書いて御覽ぜよ、貴殿の御名とても、劣らず結構な御名でムる、口に唱へて御覽ぜよ、何れに優り劣りもムらぬ、秤器に懸けて御覽ぜよ、同じく輕重はムるまい、よしや呪文に誦するとても、シーザーにて寄り來る亡魂は、ブルータスでも寄つて參らう(此時又歎呼の聲聞ゆる)然るに彼シーザーは、抑も如何な

る穀を食すればか、彼の様な巨人とはなり濟ませし。あゝ時勢は澆季に流れしよな、あゝ羅馬は古への骨硬の士を失ひしよな。天地開闢の昔より、何れの年にか、只一人の名のみ聞かれ、其他はあれどもなきが如き、今日の如き時代あらむや、古往今來羅馬の歴史を語るもの、誰か此羅馬の廣やかなる城壁(羅馬の市を圍繞する城壁)が、只一人を包みし時代あるを證するものぞ、あゝ羅馬の市に、只一人の人間あり(其他は皆蛆虫同然)とは、さて羅馬は廣い事かな、あゝ貴殿とても某とても、故老より承れる物語、古へ貴殿と御同名のブルータスと申す偉人(アルシアス・ジュニアス、偉人は羅馬の王ターキンの一族を廢し、共和國を作り出したる巨魁の一人なり)は、羅馬に國王あらせむよりは、寧ろ魔王を戴かむとさへ云はれし趣。

タブ
スル

不肖なる某への貴殿が御厚誼、少しも疑は致し申さぬ、まつた貴

殿が某への御冀望も、大概推察は仕る、それに就け又今日此頃の時勢につけ、某が心中は何れ後日を期して御懇談申上げむ(カッシア語を此續んとするながら)先づ差當り只今は、此上某の心を御騒がし下されぬ様、御厚誼に甘へて祈ります。只今の御詞は熟と勘考致しませう、又此上仰せ聞けられうずる御詞は、斯る大事を承りもし、御答も致すべき好機會を見圖らひ、謹んで聽問致しませう(此時歎呼の聲前より)先づそれ迄は貴殿にも、尙ほ熟と御勘考遊ばされい、兎角此ブルータスは、羅馬の民と名乗りつゝ、今日此頃の大勢が齎さむずる秕政の下に、満足してあらむよりは、邊土遠境の山賤に、身を下したい願てゐる。

アカスシ 某の微弱なる一言が、それ程迄、ブルータス殿の御胸に響きしとあれば、此上の満足は、ムりませぬ。



「子様の館歸はに—ザーシえ見としり終や早も走就」
「……き引を袖の殿カスカ時るあ行通を處此で體」

と音楽聞ゆる

タプスル 競走も早や終りしと見え、シーザーには歸館の様子。

アカツシ 聽て此處を通行ある時、カスカ殿の袖を引き、様子を御聞なされませ、例の皮肉で、今日の様子の大略を、物語らるゝ事でムらう。

と音楽を奏し、シーザー、アントニー及び其一行再び登場

タプスル いかにも左様致すてムらう。乍去見られよカツシアス殿、アレ、

シーザーの額の上には、憤怒の形相を現じてムる、まつた其餘の者共は、主の不興を蒙つた従僕と申す見得、カルバーニアの頬の青さ、彼のシセロが、小さい赤い鋭い眼を光らす有様は、いつぞやカピトルの堂内にて、議事員の誰彼に云負かされし時を其まゝ。

アカツシ カスカ殿に尋ねたなら委細分明致すてムらう。

ザン いかにかにアントニー。

ニアント 何事でムりまする。

ザン 外でもない、我れは平生、身肥え、軀豊に、顔に光澤あり、夜を安う眠るが如き人々を、身邊に置きたい願ひ、彼處に見ゆるカツシアスは、痩せ且つ飢ゑたるが如き容顔、餘り物事を思ひ過すと見ゆる、吳々も彼様な人物は危険なるぞよ。

ニアント イヤ御氣遣あらせられまするな、彼は危険なる人物ではムらぬ、いさぎよき羅馬の士、至つて結構なる人物でムる。

ザン たゞ彼の憔悴が氣に入らぬ、シーザー敢て彼を恐るゝとは、あらねども、若し我れ世に恐るべきものありとせば、彼の瘦せたるカツシアスならで、他に恐るべき者ありとも覺えず、彼れ能く古今の書を讀

み、時勢の觀取を怠らず、能く人事の機微を洞察するの明あり、而かも和殿等一流の如く、演藝を見るを好まず、音樂を聞くを喜ばず、笑み傾くる事だになく、偶々笑へば己れを嘲るが如く、又物事に笑を催さむずる、己が心をあざむが如き苦笑（苦むら）思ふにかゝる人間は、己れに優る人間の世に在るを認むる間は、心の安まる暇もあるまじ、危険なりとはこの事乍去、こは只だ恐るべきは、此の如き人物といへることを申せしなり、予が現在恐るゝ人物を申せしならず、ハテ予はいつとてもシーザーならずや、イヤ左側（ひだり）の耳は聾いたるに依つて、右側へ廻られよ、さて和殿が彼に就きての心中を、其儘語れ聽聞致さむ。

とアントニー、シーザーの傍へ寄る、ブルータス道を横ぎりてカスカの傍へ赴き袖を引く、音樂の音にてシーザー及び其一行退

場、カスカ、ブルータス、カッシアスの三人後に残る

カカス 某の袖を御引留なされたは、何ぞ某に御用ばしムるか。

カカス いかにもカスカ殿、シーザー公には、甚く御不満の躰（てい）に見受くるが、今日何事かムつたか。

カカス ハテ尊公には、御同伴なされましたらうに、左様ではムらぬか。

カカス 若し同伴致したなら、かやうな事を貴殿に御尋ねは致すまい。

カカス 外でもムらぬ、王冠を献（たま）げた者がムつた、乍去シーザーには、件の王冠を、手の甲にて此の如く（手にて押返す）押し返しました、其時てムる、一同歡呼の聲を挙げましたは。

カカス 然らば再度の叫聲は何事でムる。

カカス ハテそれも同様の次第てムる。

アカツン 叫び聲は前後三度聞かれましたな、最後は何事でムる
カス それも同様の次第でムる。

アカツン 然らば王冠を獻げたは、前後三度でムつたか。

カス 如何にも三度之を獻げ、三度之を推返しました、但し一回は一回より、次第に手柔かに推返しましたが、其度毎に正直なる人民共は、歡呼の聲を擧げましてムる。

アカツン して其王冠を捧げたは何者でムるな。

カス ハテ、アントニーでムる。

アカツン カスカ殿、精しい様子を御聞かせ下され。

カス イヤ其御尋は、眞つ平御容赦あれ、何がさて一席の狂言でムつた、某はようも心を留めませなんだ、乍去彼のマーク、アントニーが、王冠

を進むる所は眼に入りました。但し王冠と申しましても、有觸れた世の常の冠かんむりでムる。さて前申上げたる如く、シーザーには件の冠を推返しました。乍去某の眼には、志かすがに取上げ見たき、彼の心中が見え透すきました。されば再びアントニーが之を進めた時、再び之を推返しながらも、觸れたる指を取離すが、残り惜しげに見えました。三度更に進めし時も、同じく三度推返しました。然るに彼がかく之を推還す毎に、賤民の群衆は、シーザー王位を辭せりと思ひ、一齊に歡呼の聲を擧げ、むくつけき手を拍たき、汗に汚れし頭巾を投げ、口中よりは臭氣ある息を放ち、其爲めシーザーは呼吸いきを塞ふらせた歎、一時氣を取失ひ、其まゝ倒れ伏しました。某は覺えず吹出しさうに致したが、笑へば口を開き臭氣を吸ふが悲しさに、漸おそう堪たへ了しましてムる。

アカツン イヤ御待ち下され、何とシーザーが氣を取失ひましたか。

カカス いかにも公會場フナトラムの上に倒れ臥し、口よりは泡を吹き、暫しは聲をも

挙げませなんだ。

タブル げに其様な事もムらう——たそれ癲癇は持病でムる。

アカツシ イヤ、シーザーに癲癇たれんはムるまい、貴殿やカスカ殿を始め、我々に

こそ、却て癲癇たれんはムらう。倒るゝは我々の勢力増すの意に従ひ

カカス 其御詞は、如何なる御意味こゝろか存ぜねど、シーザーが倒れたは眞實で

ムる、賤民共は或は喜び或は悲み、喜ぶ時は手を拍つて囃し、悲む時は

叱と呼び、宛ら劇場にて、俳優に對する如くてムつたは、紛れのない御

話でムる。

タブル 一 さて正氣に復りし時、シーザーには何と申されましたな。

カカス 御聞あれ、倒れる前の事でムる、群衆共が王冠を退けしを喜ぶを見、

シーザー何とか思ひけむ、むんづと己が襟元を押開き、咽喉のどを突出し

て群衆に向ひ、此處を切れ——と呼ばゝりました、素より某は件の詞

を、彼が本意とは思はねど、若し身賤しき職人にてありしならば、必ず

應と答へて立上り、彼が望を叶ひたてムらうに、それもならねば、たゞ

控へて觀てある中、いつか氣を取失つて倒れましたが、再び正氣に復

りし時、群衆共に打向ひ、身共が詞、素振に、何ぞ怪しからぬ様子はな

りしか、これも畢竟病氣故と一同勘忍せられよとの辨解まをわけ、某が傍に居

合せたる三四の婦人は、あな優しの御心や」と聲を挙げ、心よりして彼

が辨解を聞届けました。尤もかゝる婦人共は、別段氣に留むべき程の

者でもムらぬ、若しシーザー彼等の母親を刺したりとも、同様の事を

申すてムらう。

タブルー さてこそ彼は彼の様に、不快の面持にて歸館の途に就きしと見える。

カカス いかにも左様でムる。

アカスツシ してシロセ殿は、其時何ぞ例の皮肉を申されは致さぬか。

リカス いかにも希語にて申しました。

アカスツシ どのやうな事を申されました。

カカス イヤそれは御話致したうても致されぬ。乍去其希語を解した輩は、顔見合せて莞爾と笑み、心有氣に首を掉りました。但し某に取つては何の事やら解し兼ねました。イヤ此外にもまだく珍聞はムる、マルラス、フラビアスの兩人(保民官)には、シーザーの彫像から冠を取捨てた

咎に依り、役目を没收られました。一某はこれにて御免、まだ一種々の狂言がムつたが、悉く忘れ果てました。

アカスツシ カスカ殿、今夕夜食を御交際下さるまいか。

カカス 折角ながら先約がムる。

アカスツシ 然らば明日晝食を差上げたうムる。

カカス いかにも明日迄某が無事で居り、貴殿の御心も變らず、又御馳走も結構とあらば、決して御辭退は仕らぬ。

アカスツシ 然らば屹度御待申す。

カカス 宜しうムる、然らば御兩所。

とカス退場

タブルー いや無作法な男ではムらぬか。まだ學びの庭に通ひし頃は、至つ

て敏慧な男でムつたに。

アカツシ 今とても彼の様に朴訥な様子は致せど、何ぞ膽力の入用な、公益の爲めの企てとあらば、それを成就致すに、昔ながらの敏慧を失ひませぬ。彼の無作法こそは、彼が知慮の藥味ツケ之あるが故に人を惹き、己が言説を喜んで傾聴致させます。

タフスル げに左様な事もムらう——さてカツシアス殿、此度こそは、これにて御別れ申す。乍去少々御懇談の筋もムれば、明日某より御訪問申さう。尤も御厭ひなくば、某方を御訪ね下さるまいか、然らば某御待ち申さむ。

アカツシ 然らば左様致すてムらう、何卒それ迄に、熟まと國事を御勘考の程偏へに願上げます。

とブルータス退場

(白) あゝブルータス、卿は廉潔の君子なり、とはいへ、卿が廉潔の精神も、我わがカツシアスが手加減にて、外道に導き入れむ事は自在なり、さればこそ君子は君子を友とすべきなれ、世に如何程の君子と雖も、必ず誘惑に堪ふる程、堅固なりとは思はれず、但し彼のブルータスと此のカツシアスが地位を替へ、カツシアスはシーザーの寵愛を受け、ブルータスはシーザーの憎悪にくしみを受くる身なりとも、彼のブルータスは、よも此カツシアスを誘惑致さうとは思ふまい。それは兎も角、今夜は某多人数の手蹟にて、羅馬の市民は、ブルータスの名に、信頼する由の書面を數多認め、ブルータスが館の窓より密かに投げ入れ、宛かも諸方より來りし如く思はしめ、其中にて、シーザーが王位を狙ふ野心をば、臚

げにほのめかさむ。さて其上は、彼シーザーに疑懼の念を抱かしむることを慎み、機を見て事を擧ぐると致さむ。事若し成らずんば、あゝ其時は天下の事早や云ふも管なり。

と退場

第三場 全前 街上

雷鳴電閃の中、一方よりカスカ拔劍にて、他方よりシセロ登場

セシロ これ、カスカ殿、シーザー公を御送り届けなされたか、ハテ何故

其様に御息を切らして、其様な御眼付をなされますな。

カカハ 大地を支ふる此地軸が、ゆらくと揺いても、貴殿は平然として居らせらるゝか、あゝシセロ殿、疾風檜の大木を裂く大嵐は従来見た事

もムる、驕る荒洋を怒り狂ひ泡立たせ、黒雲の上迄騰らせむ。暴風は、従来見た事もムる、乍去今日の今夜の此今迄、火を雨らす大嵐に出逢うた事はムらぬ、天上の神達互に鎗を削り給ふか、又は地上の人間餘りに非禮なるを怒り給ひて、神達の此地上に破滅を降し給はんずるか、誠に不思議な事でムる。

ロシセ して不思議と申すは、たゞそれだけでムるか。

カカス されば官衙に奉仕致す一人の奴隸——これは貴殿もよう御見知りの方でムる——此者がふと其左手を上ぐると見れば、凡そ松明を二三十集めた程の焰を發つて燃えながら、其手は少しも熱を感えず、焦げ爛れなども致さぬ様子、これも稀代の不思議でムる。此外又某は——遂只今の事未だ白刃を收むる暇もムらぬ程でムるが——議事

應の傍を過ぎりしに、一匹の獅子現れ出で、暫しは某をじつと見詰め居りましたが、噛み付きなども致さず、呻りながら立去りました。又其數百人ばかりの婦人、怖毛立つて顔色蒼然としたるが、一處に寄り集れるを、何ぞと問へば、全身焔に包まれたる男共、街上を往復致すを見たりと申す。又遂昨日の事なりしが、一羽の夜鳥(鶉)日中に現れ、公會場の上に栖とまり、物凄ものぢい聲にて鳴いたと申す。一つならず、二つならず、かゝる不思議の重なるは、只事ではムらぬ。これも畢竟天地自然の發現なるとは云はされぬ。いやさかゝる不思議の起ると申すは、其國其地に變事のある不吉の前兆。

ロシセ げに陰陽其和を得ざる今日此頃、乍去己がじゝなる人々の判断は、自然の眞意を酌み違ふるが常でムる。してシーザーには明日議事廳

へ出應の模様でムるか。

カカス いかにも出應の様子でムる、と申すは明日出應の赴き、貴殿に傳言致し置けと、シーザー自らアントニーに命じたるを立聞きました。
スシロ さらばカスカ殿、これにて御別れ申さむ。此空模様は長歩きは無用でムる。

カカス さらば、シセロ殿。

とシセロ退場

カツアス登場

アカツシ 其處に居らせらるゝは何誰でムる。

カカス 外でもない羅馬の市民。

アカツシ 御聲はどうやらカスカ殿。

カカス　いかにも御耳は確かてムる(此時雷鳴電閃)いやカッシアス殿今夜は抑も何たる夜てムらう。



は夜今殿スアシスカ……
いらムて夜るた何も抑

アカスツシ　心に疚しき事もなき身には、誠に心地善き夜てムる。

カカス　昊天の懲戒ちやうばい此の如きことあらむとは、誰しも思ひ設けぬ事てムる。
アカスツシ　いや此地上に充ちくたる、人間の罪科に心附きたる人々は、さる思ひ設けも致さぬ事はムるまい。某などはかう市中を漫歩致し、此危嶮なる夜に此身を暴し、御覽の如く衣もほらく、此胸を雷火の撃つに任せしまし、凄惨たる一道の電光、天の懐よこたへを漏るゝと見れば、天火降來る筋道の、中央へ我から我身を差向けをす。

カカス　ハテ何故貴殿には、我から天威を御冒しなさるゝ、八百萬の神達が、我等人間を驚かさむとて、御使はしめの風雨雷電を、地上に御降しある上は、只管恐れ顛つき、慎つましう致すが我等の本分てムらう。

アカスツシ　愚かなりカスカ殿、乍憚貴殿には、羅馬の市民に具はるべき、明智達識を御有ちなさるゝ、よし御有ちなされても、御役に立てねば有た

ぬも同然。天神怒を爲す此不思議を御覽なされて、御色は青ざめ御目は鈍り、恐怖に包まれ驚愕に閉ぢられてのみ在す御容子。乍去かゝる不思議の依つて来る、眞の理由を御勘考あれ、何故火は雨と降り注ぎ、何故幽霊街頭に彷徨ひ、何故鳥獸其天性に立戻りたる舉動爲し、何故老人智を失ひ、小兒却つて分別に富み、さては何故此等の物何れも其常規を失し、其性に乖き理に離れ、奇怪の物と變ぜしや、ハテ其理由を熟と御勘考なされたなら、こは天此等の物に托して、何ぞ只事ならぬ一大事を、我等に示し、我等を警めらるゝ爲めの、天意神託と御合點が參るでムらう。いや、カスカ殿、此恐ろしき夜にも似たる、さる恐ろしき人の名を、貴殿の御耳に入りたいものでムる、件の男は口を開けば雷の如く轟き、其名は電の如く輝き、其威は死人を墓に呼起し、議事廳内

に坐する時は、獅子の如く吼ります。其身は素より鬼神にもあらず、貴殿や某に優れたる力あるにもあらねど、今夜の怪を見る如く、恐るべく驚くべき、一大巨人となり了せは、想へば、不思議でムる。

カカス さ仰せらるゝは、シーザーの事ではムらぬか、如何でムるカツシアス殿。

アカスシ 誰と指して、申す迄もムるまい。今の羅馬の市民とても、祖先に劣らぬ筋骨は備つてムる、乍去嘆かはいしい哉、羅馬男兒の魂は滅び、残るは婦人のめ、しさばかり、ハテ奴隸の境界に沈淪しても、政道の抑壓に忍び居る我等市民は、め、しさの骨頂ではムるまいか。

カカス 實に、議官達には明日を以て、シーザーを羅馬王に推薦なさむ企劃の由、さて彼れシーザーには、此處伊太利を除くの外、海と陸との

差別なく、國外に於ける羅馬の領土に、君とし臨む所存の由。

アカツシ　さる事あらば某は、此小劍（おのこ）て果つるばかり、此カツシアスはカツシアスを、奴隷の耻辱（ちじむ）より、救はずには置きませぬ。さてこそ神は弱きをば、いと強きに變へさせ給ひ、かくてぞ神は世の中の、暴君（たうきん）虐主を敗らせ給ふ。石の塔（かた）黄銅の壁、毒を吹く土牢、さては鐵の鎖（くわい）とても、精神の發する所を、よう制へは致されぬ。又かゝる障害をうるさしと思はゞ、五尺の形體は小なりと雖も、自ら果つるの氣力（きり）に事は欠き申さぬ。こは某自ら信ずる所なれど、願くは浮世の人にも、我が身に振りかかゝる壓抑は、我が心次第にて、勝手に振拂ふ事も成るといふ事を、知らせたいものでゐる。

雷鳴未だ止まざる體

カカス

某とても其通り、いやさ如何なる奴隷とても、我身の鎖を斷つ爲めの力は、其手に備つてゐる。

アカツシ

然らば彼れシーザーが、王位の非望を抱きしは何故ならむ、ハテ御存じないか、羅馬の民を従順な羊の群（むれ）と見縊（む）らざば、己れ狼たらしむとの念願もえ起すまい、羅馬の民が鹿たらずば、シーザーとても獅子たらし、如何なる炎々の火も、急ぎて之を燃やさむとせば、先づ藁屑（わらくず）を焚（たき）附（つ）とし用ふべし、あゝ此大羅馬も、シーザー如き一匹夫を、燃やさむ爲めの薪に過ぎずば、はかなき藁屑（わらくず）に異ならず、さりながらあら悲しや、此處は何處でゐるかゝる御話を致した貴殿は、國王派の一人で在らせらるゝやも測られぬ、果して然らば某は、早速逮捕の憂目を見る事でゐらう、乍去某には覺悟がゐる、此某は如何なる危害をも恐ろし

とは思ひませぬ。

カカス 御心配あるなカツシアス殿、かりにも某はカスカでゐる、安りに人の密事など、口外致す者ではムらぬ。いざ此手を御取り下され、何と貴殿は國家一朝の禍を、未然未萌に防がむ爲め、一味徒黨を御集めなさらむとの思召でムらうが、然らば早や、御集めなされ、某なども後れ馳せながら馳せ参じて、人後には落ちませぬ。

アカツシ ホ、天晴々々、それにて盟約は調ひたり(とカスカの手を握りながら)今こそ御聞かせ申さむカスカ殿、某は既に心ある、羅馬の義士若干名を説き勧め、危うかれども貴たよかる一大事を、共にせむとの義盟を結びましたぞ、又件の義士達には、折しも今夜、大ボンベイが、紀念の劇場の廻廊にて、某を待ち居る筈(と又雷鳴、電閃)幸ひ此物凄き夜中の事、街上に動めく人影も

ムらぬ、まづた此空模様、何うやら我等が企劃たくはの、其所業にも似通ひて、其物凄さ、恐ろしさ、天も心こゝろありげに見えませぬ。

カカス 暫く御停りなされ、此方へ急ぎ参る者がムる。

アカツシ 彼こそはシンナ殿、足取りに記憶おぼえがムる、これも義黨の一人てムる。

シンナ登場

ヤア、シンナ殿左様に御急ぎあるは、何處へ御出なさる。

ナシン 貴殿を御捜し申す所、御同伴つれは何誰どなたでムるメテラス・シンパー殿か。

アカツシ イヤ、カスカ殿でムる、我等が大望に御一味下された仁でムる、さてシンナ殿、方々には、某を御待合せてでムらうな。

ナシン それ承つて安堵致した、何と恐ろしい夜ではムらぬか、我等の中に

は、不思議の怪を見た者もあるげにムる。

アカツシ 方々には、某を御待成されてはムらぬか、如何てムる。

ナシ いかにも御待成されてムる——お、カツシアス殿、此上の望に

は、彼のブルータス殿を、我等が一味に附けたいものでムるが——。

アカツシ 其御心配は先づ——御無用、いやシンナ殿に御願がムる、此書附

を大判事席(當時ブルータスは羅馬の大判事なりしなり)の倚子に、ブルータス殿の目に附

くやう、密かに御貼附け置き下されい、又此の一枚は彼が館の窓へ御

投込み下されい、して又此の一枚は大ブルータス(羅馬を共和国となす最初のブルタス)の彫像の上へ、臚にて御貼附け下されい、さてそれが濟んだ

上で、ボムベイ劇場へ御出て下さらば、我々一同御待ち申さむ、してデ

シアス・ブルータス(これは前のブルーカス・ブルータスとは別人なり)殿、又トレボニ

アカツシ 其上にて劇場へ、屹度御参會下されい。

ナシ 彼君にも十中の三分は、既に我黨の士てムる、此度會見致せし上

は、悉く我黨に與せらるゝ事てムらう。

アカツシ 我等一味の所爲と申さば、迂散臭く思はるゝ事なりとも、彼君が味方

アカツシ 其上にて劇場へ、屹度御参會下されい。

とシンナ退場

いざ——カスカ殿、御同道にて此曉前に、ブルータス殿を館に訪問申

さむ、彼君にも十中の三分は、既に我黨の士てムる、此度會見致せし上

は、悉く我黨に與せらるゝ事てムらう。

アカツシ 我等一味の所爲と申さば、迂散臭く思はるゝ事なりとも、彼君が味方

は、悉く我黨に與せらるゝ事てムらう。

をせらるゝとあらば、宛も煉金の術者が、瓦を玉と化するが如く、何事も徳行善事と見ゆるは必定。

アカツシ　いかに彼君が身分人となり、さては我等が彼君に頼む所の大いなるを、貴殿よう御合點なされる、いざ／＼参りませう。最早夜半も過ぎてゐる、曉前には彼君を驚かし、確かと味方に附けいてはなりませぬ。

と一同退場

第二幕

第一場——羅馬　ブルータス家庭園(時は夜半)

雷鳴電閃の中アルータス登場

アルータス　ヤア、ルーシアス(アルータスの召使ふ童僕)起きよ／＼——今夜は星の移動を見て、刻限を推測することも相成らぬ——ヤイ、ルーシアス、え、身共も其様に熟睡致して見たい。ヤイ／＼、ルーシアス、起きよ／＼、ルーシアス、起きよ／＼。

ルーシアス登場

アルータス　御召しなされましたか我が君。

アルータス　こりや、ルーシアス、身共が書齋に燈火の準備を致せ、さて準備が成た上で、又此處へ呼びに参れ。

アルータス　心得ました。

とルーシアス退場

マスル！ あゝ所詮亡き者に致さずばなるまい(シイザイを殺さるるを意味す)此身に取りては、彼を討つべき恩怨更になけれども、大義は親をも滅ぼす習ひ、彼れ一度王冠を戴きなば、それ故日來の氣心の變るとなしとはいふ可からず。日暖かなれば潜める蛇も這出づる。警むべきは此時に在り、王位に彼を推戴せむは、彼に毒蛇の舌を與へ、心の儘の毒惡を流さしめむとするに等し。凡そ萬民の上に立てる者、一旦大權を握り、下を憐むの情を失ふ時、災害尤も甚だし。情らシイザイが人となりを察するに、思慮に深うして情誼に淺ければ、所詮仁慈の君主とは成り難し。夫れ民生は大望の梯子なり、此梯子を攀づる者は、我が地位未だ低き中は、面を向けて繩れども、一旦頂上に登る上は、忽ち之に背を向けて、我身を此處迄運び來れる、大恩の梯子を嘲笑ひ、其目は只管九重

の雲井に注ぐが常なるを、シイザイとても數には漏れじ、今にして防がずばある可らず。然りと雖も猥りに、無名の争ひは爲すべからず、先づ大義名分を定め置かむに、此上彼が權勢を増長せしめば、遂には潜越の舉動あらむ。譬へば今のシイザイは宛かも毒蛇の卵の如し、一たび孵化せば、そが天賦の性に從ひ、害毒を世に流さむ。未だ殻を出でざる中、殺害なすに若くはあらじ、我等が陰謀の理由と云へるは、即ち此の如しと云はむ。

ルシイアス再登場

アルシイ 我君、御書齋に燈火を點けましてムります。燧石を尋ねやうと致し、御窓の邊りを探りましたに、此様な封書を見附けましてムります。私が寝みます時迄は、確にかやうの物はムりませなんだに。

と封書をアルに手渡す

アル　　汝は又寝むが宜い、まだ夜明には程があらう。いや尋ねる事があ
る、明日は三月望の日であらうな。

アル　　私は存じませぬ。

アル　　然らば唇を見て参れ。

アル　　心得ました。

と電閃の間にカー退場

アル　　空を切る流星の光にて、何うやら文字も讀めるであらう。

と件の封書を開封し讀む

眠れるかブルータス、眼を開いて己れを省みよ、嗟乎此羅馬を奈何
すべき、徇へよ、討てよ、救へよ君。



空を切る流星の光の何てにやう
ら文字も讀めるめあうら

「眠れるか、ブルータス、眼を
開け」とな、又しても拙者を、
煽動なさむが爲めの此文
書、今に始めた事ではない。
「此羅馬を奈何すべき、奈何
すべきとは何事ぞ、察する
に此羅馬は、一人の威歴の
下に立つべきかとの謂て
あらう、嗟羅馬か羅馬、昔し
タクキンの一族が、羅馬
に王と稱せし時、拙者が祖

先の一人は、彼を羅馬の國外に逐へりとか、徇へよ、討てよ、救へよとは何事、さては此拙者をして大義を徇へ國家の蠹賊を討たしめむとな、おゝ羅馬、我は羅馬に約せむ、若しそれ故羅馬を救ふ事を得ば、いかにもブルータスは、其重望にそはむが爲め、一臂の勞を惜みは致さぬ。

ルシアス又登場

アルシ 我君、三月は早や十五日と相成りましてムります。

此時奥にて門を叩く音する

プスル 大儀なりしぞ、や、誰ぞ門を叩く者がある、出て見やれ

とルシアス退場

想へば彼のカツシアスが、シーザーの無道を説き、拙者が心を騒がして以來、拙者は遂に一睡も致さぬ、凡そ大事をたくらめば、事成就の曉

迄は、中有の空に彷徨ふ思ひ、恐ろしの夢を見る心地、此魂と此肉とが、寄々密議を凝すと見え、此一身は宛ら一小國、一掻反亂の將さに發せむとするにも似たり。

ルシアス又登場

アルシ 御出なされたは、御妹、舞カツシアス様(カツシアスが妻はプ)、我君に御對面遊ばされたいとの事でムります。

プスル して同伴者はないか。

アルシ いや御同道の御方がムります。

プスル 何人なるや、其方承知致すか。

アルシ いや頭巾を耳迄引下げ、顔は半分外套の中に埋もれてムる故、何誰様と申すことを、見分けう手懸りもムりませぬ。

タプスル 兎も角も此方へ通せよ。

とルロシア退場

大方一味徒黨の者であらう。頭巾眉深に、顔は外套に埋もるゝとな、魔性の物凡て横行すてふ此夜陰に、如何に秘密の陰謀なりとて、包み隠しも程こそあれ、さては白晝何處の洞穴にか潜まむとすらむ、如何なる深山の巖窟も所詮陰謀の顔色を包まむ程は暗からじ、否とよ、洞穴巖窟が何の用、談笑自若の間にこそ、陰謀の面は包むべけれ。縦令陰府の闇と雖も、そが本來の容顏の、陰暗の色は蔽ふべきか。

カツシアス、カスカ、デシアス、シンナ、メテラス、シンバ、及びトレ

ボニアス等一味徒黨の者悉く面を被服に包みて登場

アカスツシ

御免あれブルータス殿、御休息の所を恐縮千萬、嘸御迷惑てムリ

ませうな。

タプスル いや某は終夜險も合はず、小一時前より此通り、起出て、居りまする。さて御同伴の方々は、何れも御見知り申す仁てムるか。

アカスツシ いかにも御見知の方々、何れも豫て貴殿をば、御慕ひ申す輩てムる。又何れも心ある羅馬の人々が、貴殿に寄する重望を、何卒貴殿御自身にも、御承知あれかしと祈り居る族てムる。(露出する)即ちこれなるはトレボニアス殿。

タプスル ようこそ御出下された。

アカスツシ 又これなるはデシアス、ブルータス殿。

タプスル ようこそ御出下された。

アカスツシ 又これなるはカスカ殿、これなるはシンナ殿、これなるはメテラ

ス・シンバ！殿でムる。

アブル！ 何れもようこそ御來駕、嬉しうムる。さて方々には、如何なる御心配がムつて、此深更を御厭ひもなく。

アカツシ それに就き一言申上げたい事がムる。

とアルータスとカツシアスと一隅に退き囁き合ふ事

アアスシ ハ、——彼方が東でムるな、夜は彼方より白むてムらう。

カカス いや左様ではムるまい。

ナシン 御免あれ、デシアス殿の仰せらるゝ通りてムる。彼の雲を綾どる、入

亂れた灰色の縞は、即ち曙光の先觸てムらう。

カカス いや何方も違ひまする、御覽あれ此劍の尖端から日は昇りま
する(と劍にて一方を指しながらいふ)まだ春の初めてムれば、大分南寄りの方角でム

る、又二月も経ちますれば、大分北寄りの方角から昇ります。正東は
と申せば(又一方を指して)丁度此處から真直議事廳の見當てムる。

アルータス、カツシアス談話を了り進み來る

アブル！ さらに方々、改めて御一人宛漏れなく握手致したい。

アカツシ 其上決心の程を、互に誓言致さうではムらぬか。

アブル！ いや誓言は御止しなされ、我蒼生の面に現るゝ不平の色、我等が
心魂に潜む懊惱、日に非なる國家の形勢——此等今日此頃の世の有
様が、尙我等所存の臍を固めしむるに足らずとならば、ハテ方々には、
少しも早う徒黨を解きて、各暖き閨の中へ御歸りあれ、さらば世は只
だ驕れる庠主の羽を伸すに任せて、各には銘々の御運次第成るやう
に御成りなされう。乍去苟にも斯る目下の形勢は、怯者をして奮ひ起

たしめ、婦人の女々しき精神に、勇氣の鋼を被する程の値ありと思召さば、然らば方々御聞あれ、我等をして國家救濟の義舉を營ましむるに、此上何の刺戟をか要すべき、將た一言は金鐵よりも重く、二枚の舌を用ふるとなき、我等羅馬人が、かく詞を番へし上は、其上に又何の固め、將た又國士と國士との約諾に、事若し成らずんば、死すとも止まじとの一言を替はせられし上は、其上に又何の誓言、僧侶乞食、心も直ならぬ者、さては希代の臆病者、如何なる屈辱にも甘んずる無骨漢共にこそ、誓言の入用はあれ、人にも疑はるゝ下司下郎が、惡事故の誓言三昧は常てゐる、乍去堂々たる我等の義舉を成就致すに、誓言の要ありなど、思ひめさるは、取りも直さず、我等が廉潔なる素志を汚し、我等が剛毅不拔の精神を辱むるものでゐる。苟くも我等羅馬の士にして、

一旦の約諾を兎の毛の末の露程も破らむ者は、祖先傳來の羅馬の血を、一滴も残さず汚し果つる者でゐる。

アカッ シ 承れば御尤も、然らば彼のシセロ殿は如何致しませう、心を引いて見ませうか、某の愚考には、屹度屈竟の味方とならるゝ事てムりませう。

カカ ス いかにも棄て、置くは不得策。

ナシ ャン 實に其通りでゐる。

ラメ ス テ ち、是非共味方に附けませう、彼の翁の銀髪は、我等に佳名を贖ふ好い資金、世人をして我等が所業に、讚嘆の聲を放たしむる、便ともなるでムらう、即ち我等が此度の所業は、一に彼翁が知慮周到なる采配の下に行はれしやう、喧傳せられ、我等が少壯血氣の勇は、少しも世間

の眼に立たず、何事も彼翁が深謀遠慮の結果と見ゆるてムらう。

タブル　あいや、其儀は御控へあれ、シセロ殿へは内密に致さるゝが宜う
ムらう、他人の創めたる事業へ、おめく加はるシセロ殿ではムらぬ。

アカス　然らば其儘に差置きませう。

カカス　實にシセロ殿は宜い味方ではムるまい。

アアス　して又我等が目指す所は、シーザー一人に留め、其他の末輩は棄て
置きませうか。

アカス　よろこそ御氣付かれた、デシアス殿某の愚考には、彼のマークア
ントニーは、シーザーが嬖臣同然、シーザー亡からむ後、彼者獨り生存
へむはふさはしからず、必ず後日に事を構ひ、羅馬を騒がす者は彼て
ムらう。各にも知らるゝ通り、一廉の分限者でムれば、一旦金力を用ひ

なば、我等を陥るゝも至難の業ではムらぬ、されば後日の爲めを慮り、
シーザー、アントニーの兩人を同時に斃すが上分別。

タブル　いやカツシアス殿、アントニーはシーザーが片腕、乍去首を刎ね
て又手足を掬ぐは、私憤の爲めに人を殺し、屍を撻うつ誹りを免れま
い。神に犠牲を供ずる心を以つて御殺しあれ、屠人の心を以て御討ち
あるな、我等が刃を向くるは、シーザーが野心にして肉にはあらず、人
の野心に血はムらぬ、あゝシーザーの肉を屠らずして、シーザーの野
心を断たむ方もがな、乍去こは及ばぬ願ひ、シーザーが血も流さずば
なるまい。去かる上は方々、大膽に彼を御討ちなされ、たゞ一點の私憤を
御挿みあるな、神前の供物と刻む心得が肝要てムる、狼の餌食と斬り
棄てゝはなりませぬ、さて愈々目的を達せし上は、哀悼の意を表はし、

我等が心は我等が手を促して、此大事を爲さしめながらも、我と我手を、今更責め罵るが如き態度をなされませい。さらば我等が殺害の精神は、偏へに止むを得ざるに出て、私の憎悪にあらざる由を明かにし、世人一統もかくと見ば、我等を呼ぶに義士を以てし、逆徒の汚名を免るゝてムらう。又彼アントニー儀は、眼中に置かるゝまでもない、シーザーの頭既に亡からむ後、シーザーの片腕が何を仕出づるものでムらう。

アカツシ　とは申せ、どうやら案ぜられてなりませぬ、彼がシーザーを思ふ心の深きにつけ――

タプスル　カツシアス殿、其御心配は御無用でムる、彼がシーザーを慕ふ心の深ければとて、彼が精々仕出る所は、シーザーの死を悲み、愁傷の餘

り、自滅致す程の事でムらう、それとても覺束ない事でムる、淫樂宴遊に目を送る、放縱自肆の彼ではムらぬか。

ニアホ　げに彼は畏るゝにも足りませぬ、棄てゝ置くが宜うムらう、此様な評定など、彼が生存へて後に聞かば、定めて笑ひ崩るゝてムらう。

時に自鳴鐘の鳴る音聞ゆる

タプスル　御待ち下され、今鳴る時辰儀は、

アカツシ　正に三時を報じてムる。

ニアホ　さらば御暇致さずばなりましたまい。

アカツシ　とは申せ、シーザーには、今日愈よカピトルへ出廳あるや如何に、ちと疑はしい事でムる、彼此頃は何故にや、日頃は笑ひくさしたりし、夢や忘想、吉凶の前兆などを、心に懸くる様子、前代未聞の今夜の怪事

に膽を消し、さては易者共の勸告もあるべく、それかれ今日の出應は、
覺束ない事でムる。

アデ
スシ

其儀は御心配あるな、彼若し出應致さぬと申さば、某に善い手段が
ムる、と申すはかやうでムる、犀は樹木を以て欺かれ、犀の獅子を襲ふや
獅子は樹木の前に
立ち兩々相脱み合ふ中、いつしか身を跳らして傍に逃るゝを、犀はかくとも
知らず突きかゝれば、角は樹木に入りて容易に抜けず、煩悶する所を反つて
獅子の爲めに殺さる。熊は鏡を以て欺かれ、熊の現るゝ所に鏡を立て置き、熊
の之の説に依る熊は鏡を以て欺かれ、人間は諂諛を以て、たばか
しとぞり、象は陷穽、獅子は係蹄を以て欺かれ、人間は諂諛を以て、たばか
らるゝと申す譬諭を申聞け、然るに尊公には、諂諛の友を御厭ひ遊ばさ
るゝは、心服の至りなど、追従を申しますれば、其實此上なき諂諛を
受けたとは氣も付かず、如何にも拙者は諂諛の友を厭ふなど、何時
もしたり顔に申します。即ち某は又ぞる此の如き談話を以て、彼が

心を和らげ議事廳へとおびき出させう。

アカ
スシ

いや我等一同にて、彼が館へ押懸け、否應なしに連れ出させう。

タア
スル

時刻は正八時が打留めでムるか。

ナシ
ン

如何にもそれを打留めと致しませう、方々忘れても御遅参あるな。

ラメ
ステ

時に方々、御承知のカイアスリガリアス殿、彼は、大ボンベイの友と

あつて、日頃シーザの憎しみを受くる仁でムるが、方々の中に、彼を
味方にと仰せらるゝ御方の、一人もないは不思議でムる。

タア
スル

云はれたりメテラス殿、リガリアス殿は仔細あつて、某とは別懇
の中でムる。貴殿御歸途に彼が館を訪ひ、急ぎ拙宅へ参るやう御傳へ
下され、さらば某より熟と申聞けるでムらう。

アカ
スシ

夜明も程ない事でムらう、ブルータス殿、此上は一同御暇申上げ

まする。方々にも御引取りあれい、乍去必らずともに、各の御詞を御忘れなく、適れ羅馬人の魂を御見せ下され。

タプスル　此上は方々、何げなく楽しい様子を遊ばされ、努我等が腹の中を、顔色に御出しあるな。恰も我國の俳優が舞臺の上に立てる如く、沈着きたる精神と、遠てぬ面持が肝要でゐる。然らば各々さらばでゐる。

とブルータスの外一同又面を包みて退場

ルーシアス、ルーシアス——よう眠り居ると見える、思へばそれに不思議はない。睡眠は人間の甘露なるを、心安く寝み居れい、浮世の煩業が人間の胸に描くなる、忘想の幻に、まだ責めらるゝ事もなければ、汝は其様に安眠致すと見える。

ルーシア（ブルータスが要）登場

シボヤ　ブルータス殿妾が夫。

タプスル　如何致せしボーシア、何故今頃床を離れた、此寒い朝の風に、汝がかよわい身軀を吹かせては堪るまい。

シボア　我が夫の御身軀とても其通り。あらう事か閨の戸を、密と外して御忍び歩行。遂昨夕の晚餐にも、俄然と御立ちなされたまゝ、御腕をかう拱み溜息吐息、物案じ顔で行きつ戻りつ遊ばす故、何故と御尋ね申せば、恐ろしい御眼色、尚ほ重ねて御尋ね申せば、御頭を御撈りなされ、腹立たしげの御足踏み、推返し又御尋ね申せば、御返事は遊ばされず、手まねで往ねとの御立腹、其上御尋ね申しては、却つて御心に逆らひ、御怒を増すといひ、殿方には有勝ちな、只一時の御氣の持ち様、何ぞの風の吹廻して、御心の焦れる迄であらうと、御指圖通りに致しました。

が、食事も遊ばさず、御談話も遊ばさず、御睡眠もなされぬとは、思へげ
餘りな御氣分の變りやう、若し其やうに御姿が御變りなされたなら、
妾が夫との見別さへもなりますまい。申し妾が夫、御心配の程を御打
明け下さりませ。

タアスル 仔細はない、少々加減が悪いばかりぢや。

シボア 御不加減とある上は、何事も御如才のない妾が夫、少しも早う御快
氣の、御工風をなされさうなもの。

タアスル 一 ハテ其工風は致し居る。これポーシア、早う臥床へ歸りや。

シボア 御不加減の御身に、肌薄の其衣裳で、冷たい朝霧を御吸ひ遊ばすこ
そ、御身の毒ではムりませぬか。御不快とありながら、暖い床を忍び出
で、冷やかな夜氣に當り、濕氣毒氣で、御病氣を重らせやうとは、解せぬ

事でムります。イヤ、ブルータス殿、御病氣の種は御胸の中にムりま
せう、此妾は貴郎の妻、それ承はらではなりません。先づ此やうに膝を
突いて、御願ひ申します。と、乍恐、これでも一度は、美はしの柔妻と、
御愛しみを受けたる妾、其昔の御情を御忘れなくば、別しては一心同
躰の誓を籠めたる、夫婦の契りを思召さば、御自分の半身たる此妾に、
御憂悶の理由因縁、又今夜御密會なされた方々は、如何なる人々と申
すことを、何卒御打明け下さりませ。ハテ闇夜に何を憚つてか、覆面な
したる五七人の方々が、此處へ御忍びなされたではムりませぬか。

タアスル 一 (シボアを抱起) 立ちや、ポーシア。

シボア 妾が夫の御心解くるそれ迄は、何時迄も下に居ります。コレ申し
ブルータス殿、其昔夫婦の誓を替はせし時、妾が夫の御秘密は、一切問

はぬ承はらぬと申しましたか、夫婦とは申しながら、飲食の御相伴、夜の御伽、又折々御談話の御相手を致すだけで、一心同軌の契りには、制



【アシーホやち立やち立】

限のある事でムりませうか。此妾は妾が夫の御情の片隅に潜んで居らねばならぬ身か、若し左様ならばポーシアは、ブルータス殿の妾手

懸、眞實の妻とは申されませぬ。

タプスル 何を申す、其許は身共が正しき妻、わが思ひある胸に通ふ、血潮にも増す大切の身にてあるならずや。

とポーシアを抱く

シボア 眞實其御詞の通りなら、此御秘密を何故御隠しなされます。いかにも妾は女子の身、乍去荷にも、ブルータス殿が百年の妻にとの、御眼鏡に叶ひし身、又いかにも女子の數には漏れねども、カトーが女と取囃された此ポーシア、かやうな人を父に持ち、かやうな御方を夫に持つ。此妾を妾が夫には、かいなでのめ、しい女子とばし思召すか、縦令御秘密を承はらうと、滅多に漏す事ではムりませぬ、御覽下され、此心の確實を自らも試さう爲め、我から刺した股の傷、妾が夫の御秘密をさ

へ守れぬ身が、此痛さをえう堪へませうや。

マスル ヤ、何と——お、神々、願はくは此身をして、此妻に耻ぢざるの夫たらしめ給へ。

此時奥にて門を叩く音する

お、聞きやれ表に案内がある、これポーシア暫く内へ。此心の秘密は、聽て其許が胸へも願つてあらう、我が方寸に藏むる大事額の皺に疊める屈托は、漏なく其許に語つて聞かさむ、先づ只今は急いで行きやれ。

とポーシア退場

ヤイ——ルーシアス、案内は何誰ぢや。

ルーシアス、リガリアスを伴ひ登場

アルスシ 我君、此御病人が御目に懸りたいと申します。

マスル 先刻メテラス殿が御噂致したカイアス・リゴリアス殿でムるな——ルーシアス其方は其方に居い。これは——カイアス・リガリアス殿、其御顔色は何うぞなされましたか。

アリスガリ 取亂したる風躰御免あれ、お早うムるブルータス殿。

マスル お、カイアス殿悪い時に御額巻をなされましたな(額巻を附くしるしなること我團の紫額巻と異ならず)イヤサ、足下は御病氣ではムらぬか。

アリスガリ いやブルータス殿、貴殿に何ぞ、美名を千歳に垂るゝ様の、御計畫がムる上は、某は病人ではムりませぬ。

マスル いかにもリガリアス殿、其様な計畫もムる、御耳にも入れませうが、御耳は御健全でムるか。

アリスガリ 天神地祇も照覽あれ、某はかう此額巻を取除けます。幾代の賢
 婦女丈夫が、生み育てたる羅馬魂今こそ此身に乗り移り、某が死せる
 精神を、今更のやうに呼び活けました、いざ／＼此上は何なりと、某に
 仰付けられい、如何なる難事をも御辭退致さず、屹度成就致しませう。
 さて御計畫は何事でムる。

タプスル 計畫と申すは病者をして、直ちに起たしむる程の仕事でムる。

アリスガリ 乍去、無病の輩を不治の病に、陥すやうの仕事もムりませうが。

タプスル 如何にも其様な事もムる、乍去委細はカイアス殿、當の敵への途
 すがら、熟と御相談致すてムらう。

アリスガリ 然らば早速御案内下され、如何なる御仕事かは存せねど、勇を鼓
 して御伴致しまする、ブルータス殿の御指圖とあらば、少しも遲疑す

る所はムらぬ。

タプスル 然らばかう御出あれ。

と二人退場

第二場—全上 シーザー館の一室

雷鳴電閃 シーザー寢衣のまゝ登場

ザシ 天さへ地さへ、只事ならぬ今夜の騒がしさ、カルパニアが三度迄
 も、出合へ人々、シーザー公を討取らむずる曲者ありと、夢中に叫びし
 も心懸り——誰ぞあるか。

一人の侍者登場

侍者 召しましたか、我が君。

ザシ 陰陽師を呼起し、今より早速神前に犠牲を供じ、神籤を承るやう命じて参れ、又それに就き、彼等が占考を承つて参れ。

侍者 畏まりました。ムります。

と侍者退場

カルバニア登場

カルバ もうし我が夫如何遊ばします、さてはこれより御出應の御所存か、今日ばかりは館の外に、御足踏御無用になされませい。

ザシ いやシーザーは出應致す、何物にまれ、我を脅かさむ程の物の、我が背後より忍び寄るにあらぬはなく、一度我面を向くる時は、悉く退散致さぬもなき日頃の威徳。

カルバ とは申しながら、御開下され妾が夫從來目前の變事などを、心に



まりムはて事變いなも例に今古夫が我にお
しまりムてり懸心らやう何かぬせ

懸くる事もなかりし妾が、今日ばかりは何とやら、空恐しう覺えまする、我夫にも現在御見聞きなされた事の外、一層恐ろしい光景を夜番の者が見届けたとか申します。大道で仔を生む雌獅子もあれば、墳墓から跳り出づる亡者もあり、空には猛り狂へる猛者共が、列をなし隊を組み、修羅の巻をさながらに、雲中に戦へば、滴たる血潮はカピトルの上に露と落ち、又何處ともなく、矢叫びの聲空を揺れば、馬は嘶き、垂死の病者は呻き苦み、辻々に彷徨ふ亡者共も、叫び狂ふたと申します。おゝ、我が夫古今に例もない變事では、ムリませぬか、何うやら心懸りてムります。

何事も神慮に依つて定まる上は、避けうとて避けられぬ人間の命數、いやシロザイは出廳致す、ハテ此かる變事とても、そは世間一統へ

の天の警告、シゝザイ一人への告げにはあらず。

とは申せ、かたむを食の死ぬるには、彗星一つ見えし例もなければ、王公の臨終には、星火の如く空を焦がすとか申します。

死するを恐るゝ臆病者は、幾度か死ぬる思ひを致せど、眞の勇士が死の味を嘗むるは、一生に只一度げに我とても、様々の不思議は聞きつれども、不思議に堪へぬ第一は、それを聞いて人々の恐れ惑ふ一事なり、思うても見よ、一度來らでは叶はぬ人間の最期は、來るべき時に來るならずや。

侍者登場

ヤア陰陽師共は何と申す。

侍者 ハ、今日の御出廳は何卒御見合せあるやうと申しまする犠牲(歌)

リ)の臟腑を抜取り調べましたが、心臟が見當らぬげにムりまする。

ザシ
|| さてこそ神々が、臆病者を耻しめの爲めの御^し仕業、今日此シーザー
とても、恐れて出應致さずば、心臟のない獸同然、(退場)いやシーザー
は左様なものには成果てまい。世に如何程の危嶮あればとて、我^{われ}シー
ザーに優る危嶮ならむや、聞けシーザーと、危嶮とは、同じ月日の下に
生れし獅子なれども我は兄にして、勇猛一際優れたるぞ、いやシーザ
ーは出應致す。

カ
ニル
アバ
|| さて、我が夫には、餘り御自分を御持みなされて、智慮分別を
御失^ましなされましたか、此のカルバーニアが立ての御願ひ、今日の御
出應は何卒御思ひ留り下さりませ、若し御心が濟ぬとなら、我が夫に
は少しも御案じなされねども、此妾が案じ過ごしを、惘然^{よげん}と思召し、思

ひ留まると仰せられませい。又議事廳^{カピトル}へはマークアントニーを遣は
して、御所勞と披露致させませう、此儀何卒御聞濟下さるやう、かう膝
を折つて御願ひ申します。

ザシ
|| え、さ程迄に申すなら、いかにもマークアントニーを以て、所勞の
由披露致させ、其許の氣の濟むやうに、今日は出應致さぬと致さう。

アシアス登場

ヤア、デシアス、ブルータスが参つた、彼を以て此赴披露致させう。

アシ
ス
|| シーザー公には御機嫌美はしう入らせられ、大慶至極に存じます
る、さて某今朝推參致せしは、是より議事廳^{カピトル}へ御供致さう爲めてムリ
まする。

ザシ
|| 幸の折りに参り合はされた、議事員達への傳言を頼み入る、別事で

もない、予は今日出應致さぬ赴を申聞けられよ、イヤナニ、出應致し兼ねるとは申さぬ、まして物事に怖ぢ恐れて、出應致さぬとも申さぬ、只だ今日は出應致さぬ所存ぢや、デシアス左様申聞けよ。

カ
ニル
アバ
御大儀ながらデシアス殿、我が夫には所勞の由、御申聞け下さりませい。

ザ
シ
イ
いや、シーザーが虚偽の傳言頼まうか、度々の戦功に、武勇隠れもなきシーザーが今更議事員の老人共に、事實を告ぐるを恐れむや、此上はデシアアス、たゞ、予は出應致さぬ所存ぢやと、傳言の程を頼み入るぞよ。

ア
テ
ス
シ
大シーザー公に願ひ上げます、何卒其理由を御話し置き下さりませ、其通りに申しただけでは、此某が物笑の種と相成りませう。

ザ
シ
理由は予が意にある、予は只だ出應致すを欲せぬ、議事員共には、此

外を申聞くるに及ばぬ、とは申せ他人ならぬ、足下の事故、足下だけに、は申聞けむ、外でもない、これなる愚妻カルパニアが、強いて出應を留め立て致すと申すは、昨夜の事、彼が見たる夢の告げ、シーザーが彫像より、紅血四方に迸り、宛ら噴水器の如くなるを、屈竟の羅馬の民共、笑を湛へて出来り、伴の血にて手を洗ふと見たと申す、さてそれを容易ならぬ不祥の兆、差迫つた危難の萌と心得、さて今日は、終日在宿致すやう、懇望致すが、黙し難く――。

ア
テ
ス
シ
乍恐申上げます、御夢の解きやうが少々違ふ様に心得ます、其御夢は至つて結構な目出たい御夢で、ムリます、尊公の彫像から、四方に血を噴き、羅馬の民共笑ましげに出来り、手を洗ふと御覽なされた

は、此大羅馬が尊公に依つて、復活の血を與へられ、それで羅馬の士君子達、後々の紀念かたみに、せめて尊公の御血潮を物に受け留め、後代の語り艸くさ、さては家の寶となさむと、争うて詰め懸くると申す謎まじてゐる夫人の御夢は即ち此意味こゝろでゐります。

ザシ ⅠⅠ いやよう判じた、よう解いた。

此上某が申上ぐる所を御聞あらば、尙ほく、以てよう判じたと御合點が参りませう。かやうでゐる御聞下され、議事員共には、今日を以て大シーザー公に、王冠を捧ぐるやう、評議一決致してゐる。乍去尊公より、今日は登應致さぬと御申遣しあらば、彼等とても變心致さぬとは申されませぬ。且つ又議事員共の中には、口善惡くちよがなき者共が、然らばシーザー公の夫人きよめが、好い夢を見らるゝ迄、評議は一先づ中止ちゆうしなど、

アア スシ

輕口を申すこともムりませう。若し又シーザー公、誠に御逃げ隠れ遊ばされ、御出應なきに於ては、見られよ、シーザー公には、我等を恐れ憚るなど、囁き合ふ事もムりませう。いや臆面もなうかやうな事を申し上げ、無禮の段は幾重にも御免下され、これと申すも、偏へに尊公を慕ひ進らす微心より、御身の上に就き、かやうな事をも申上る次第でゐる。此微心故には、禮儀作法を顧みるの暇もムりませぬ。

ザシ ⅠⅠ あれ聞いたか、カルバーニア、かく聞けば其許が心遣ひは、げに愚かしさの骨頂、其許の詞に従うたは、想へばシーザー汗顔の至り。此上は早う時服を出せ、拙者はこれより登應致す。

バブリアス、アルータス、リガリアス、メテラス、カスカ、トレポニウス、及びシンナ登場

アレ見よバブリアスが迎へに参つた。

とカルバーニア退場

アバ
スプリ シーザー公には御機嫌よく。

ザシ
リ ようこそバブリアス——お、ブルータス、足下迄が早々と——ヤ
ア、カスカ——それなるはカイアスリガリアスカ、見れば痛う衰弱の
様子、足下に取つてはシーザーよりも、病氣がきつい敵と見えた(リアガ
スはホームベイに左祖したる政客として
シーザーとは敵なりしこと前に見ゆ)——さて時刻は何時（なんどき）であらう
な。

タブ
スル 八時の鐘は打ちましてムる。

ザシ
リ げに各々が厚情嬉しう思うぞ。

アントニー登場

見られよ夜なく、更（か）たくる迄、酒宴遊興に耽るが常なる、アントニー
までが起きて参つた。——アントニーようこそ。

ニア
ント 大シーザー公には御機嫌よう。

ザシ
リ 早速ながら御身は、供揃への仕度を命じて呉りやれ——此やうに
各々を待たせ置くも不本意千萬——さて其處（そこ）なるはシンナカ——
又其處（そこ）なるはメテラスぢやな——何と、トレボニアスも一緒か、足下
へは凡そ一時程、語らては語り盡されぬ程の積る話がある。先づは今
日、館を訪問（訪問）はれたを忘られな、いやも少し手近へ進まれよ、予もよう
足下を記憶（記憶）え置かむ。

ニト
アレス いかにも進ませせう——（白）兼てシーザーの寵愛に誇る者が、安
き心もあらざる迄進むでムらう。

ザシ 各々には、別室にて暫く一献酌みかわされよ、さて其上にて、睦まじ
う打ち揃へ、出廳致すと致さう。

と一同退場アルータス一人残る

アル 表面ばかりの睦まじさ、裏面は見懸に寄らぬとは、お、シーザ、
想へばブルータスが胸は裂けるばかり。

とアル退場

第三場 全上 議事廳附近の街上

アルテミドラス(クニダスの
議辨家) 書附を讀みながら登場

アルテミ 「謹みてシーザに白す、ブルータスに御心許されな、カツシ
アスに御戒心あれ、カスカを御身近う寄せられな、シンナに御



【……け受ち待ち行通御の公-ザ-シにてに處此】

目留められよ、トレボニアスを信
給ふな、メテラスシンパーに異心あ
り、デシアス、ブルータスは公を慕ひ
進らせず、カイアス、リガリアスは公
を恨みまゐらすなり、凡そ此人々は
一心同志の輩にして、シーザに公を
敵とし狙へり、公若し不死不朽の御
身ならずば、冀くは四邊りに御目を
配らせ給へ、安心は反逆を誘ふの道
にぞある、八百萬の神々仰ぎ願くば
公の御身を護らせ給へ。

乍蔭常々公を慕ひ進らするアルテミドラス

お、此處にてシーザー公の御通行を待ち受け、直訴人の振にて、此書を御渡し申さむ、兎角善人は人の嫉妬を受け易いとは、嘆はしい事てゐる、お、シーザー公、幸に此書附を御披見あらば、御存命あらうずれども、萬一其事なき時は、ハテ命數の神さへ、叛人原の味方を致されると申すもの。

と退場

第四場——全上 同じ街上の他の方面、ブルータ

ス館の前

ボーシア、ルーシアス登場

シボア！ これルーシアス、其方は早う議事廳迄走つて行きや、其口返答要らぬ事、早や、行きやれ、何故其様に行きやらぬぞ。

アルス！ 乍去夫人、彼處への御用は、何事でムります。

シボア！ 彼處への御事などを、云て聞かす間も待遠しい、早う往んで早う戻つて来やれい喃——(自旁) お、此森く胸を鎮めたい、心と舌との其中に大山を据ゑて隔てたい(心中にある秘密——アルータス等シーザイ殺害弱く口舌に送り出でん) 心ばかりは殿達にも劣らねど、力は道が女子の悲しさ、秘密を胸に包むといふは、女子の身に取り、さて、辛い事ではある——お、其方(アルス) はまだ其處に居やつたか。

アルス！ 夫人、して私の御用は何とてムります、議事廳へ馳せ付けるばかりで、御用も致さず、其まゝ馳せ還るばかりとは、さて合點のまゐらぬ

事。

シボ
ア | おゝかうぢやわいな我夫には御出懸の砌り、御不快で入らせられ
たが今はどのやうな御容態やら、それを見届けて参るのぢや、して又
シーザー公には何をなされてか、どのやうな訴人共が、彼公の前へ詰
め懸けてか、よう氣を附けて見て参りや——いや喃ルーシアスあれ
を聞きやれ、あれは何の騒ぎぢやぞえ。

アル
ス | 夫人、私には何も聞えませぬ。

シボ
ア | よう聞きやれ、どうやら喧嘩でもあるやうに、騒々しい人聲が、風に
誘はれ、議事廳の方から、微かに響くは辨耳か。

アル
ス | 眞實私には、何の音も聞えませぬ。

賣卜者登場

シボ
ア | これ其處な者、ちと物を尋ねたい、其方は何處から参つた。

賣卜者 自宅より参りました。

シボ
ア | 時刻は最早何時であらうぞ。

賣卜者 九時頃でもムリませうか。

シボ
ア | シーザー公には、最早御出應めされたか。

賣卜者 まだ御出應なされませぬ、私も議事廳への御通行を拜見致さう
爲め、善い場處を取りに参ります。

シボ
ア | さては何ぞシーザー公に、御訴訟があると見えるな。

賣卜者 いかにも夫人、左様でムリます、私風情の申す事に、御耳を御貸
し下されうならば、御身を御大切に、御用心なされと申上ぐる心得で
ムリます。



『……もてて企のとうかう何を公-ザ-シぞ何らなんそ』

シボ
アハテ、そんなら何ぞシィザ

公を、何うかうとの企てども。

賣ト者 いや其様な事は存じませ

ぬが、其様な事は有りがちなも

のでムりまする。左様ならば夫

人、此處ら邊りは街も狭く、シィ

ザィ公の御後きさに續く群衆の雜

踏、議事員方やら判官達、大勢の

訴人共で、押合ひへし合ひ、私如

き老人は、半死半生の目に逢ひ

ませう。それ故もつと廣い場處

を見立て、御通行を待受け、言上致すと致しませう。

と賣ト者退場

シボ
ア

心懸りな事ではある、とはいへ妾も、今は家へ入りませう、さて〜

女心といふは、誠にはかないものではある、おゝブルータス殿、何卒神

々の御加護を以て、首尾克く御本望を御遂げ遊ばしませい——これ

はしたり、ルーシアス聞きやつたか——いやなう不審には思ふまい、

我夫ブルータス殿には、恐らくシィザィ公も御許しあるまじい、御訴

訟があるといふ——おゝ、どうやら氣も遠くなるやうな、これルーシ

アス、一走り走つて参り、妾は心丈夫に御待ち申すと、我君に申上げや、

そして直様戻つて参り、我君が御詞を、早う此身に報告してたもれ。

と二人右左に退場

第三幕

第一場—羅馬

議事廳 議事員等着席

なし居る躰

カピトルに面せる街上には人民の群衆、其中にアルテミドラス及び第一幕の賣卜者交り居る、喇叭の音にて、シーザー、ブルータス、カッシアス、カスカ、メテラス、トレボニアス、デシアス、シンナ、アントニー、レピダス、ポピリアス、パリアス等登場

ザシ (賣卜者を見懸けて) いかにも易者、三月望の日は來りしぞよ。

賣卜者 御意の通りにムります。乍去まだ望の日は暮れはてませぬ。

アルステミ シーザー公に申し上げます、何卒此書附を御披見下されませう。

アルステミ いやトレボニアス殿よりの御願書がムる、何卒御閑暇次第御一覽願ひ奉るとの申出でにムる。

アルステミ いや、私の書附を、何卒御先へ御披見下さりませ、シーザー公の御一身に係はりまする願書でムりまする、何卒取敢ず御一覽下されませう。

ザシ 何と、予の一身に係はる願書とあらば、後に廻すと致さう。

アルステミ いや、御猶豫は御無用、只今即刻御披見下されませう。

ザシ ヤア、此奴は狂人ぢやな。

アルステミ 下郎退り居れ。

とアルテミドラスを推退げる

アルステミ 此街中にて、御途上をも願みず、立っての御願ひ、慮外者奴。

さよく 議事廳へ御越しあれ。

とシーザー 議事廳内へ昇り行く、従ひ來れる者共後に附き昇り行く、議事員等一同立禮する、シーザー正面の座に着席する。

アスピリ (カツシア) 今日くの御計畫けい、乍は蔭首尾克く成就を祈ります。 (アスピリはア徒黨たの一人ににし)

アスピリ (カツシア)

アカツシ 何と仰せられます、計畫とは何事で、ボビリアス殿。

アスピリ いやさ何でもムらぬ、さらば。

とボビリアス、シーザーの傍近く進み行く。

アカツシ カツシアス殿、ボビリアス・レナには、只今何と申された。

アカツシ 今日我等が陰謀成就を、乍蔭祈ると申しましたが、若しや大事露顯致せしやも測られず。

アカツシ 御覽あれ、彼奴はシーザーの傍近く進み寄りました、よう御目留められい。

アカツシ カスカ殿御猶豫あるな、何うやら邪魔が入りさうで、ムる——。

ブルータス殿如何致したもので、ムらう、ハテこれが露顯の上、シーザーを斃さぬとあらば、カツシアスは生還を期しませぬ。

と此時ボビリアス、シーザーの手を接吻する

アカツシ カツシアス、遠てめさるな、ボビリアス・レナは、我等が陰謀の告口

は致さぬ様子、御覽あれ、彼の通りの微笑顔ほほえみ、まつたシーザーの顔色、少しも變らぬは確かな證據。

アカツシ いや御覽あれ、ブルータス殿、トレポニアスが、いしくも時機を見圖らひ、マークアントニーを、物陰へ連出しました。

とアントニー及びトレボニアス退場

アテスシ (アルヘタス) さてメテラス・シンパーには何處に居ります、早速進

み出て願書をシーザー公に奉呈致さるゝ様致したい。

と此時メテラス、シーザーの着座近く進み出る

メテラス殿には、最早進み出でました、貴殿も後から推懸け助太

刀なされ。

ナシメ カスカ殿初太刀は貴殿でムるぞ。

カカス 何れも覺悟は宜しいか。

とシーザーの座の傍へ行く

ザシロ いかにも一同訴訟あらば申されよ、かく申すシーザー、議事員一統と

協議の上、よしなに詮義致すべし。

ラメステ 至高至尊なるシーザー公に言上致す、乍恐メテラスシンパー先づ

此通り御前に平身低頭致し――

とシーザーの前に跪づく

ザシロ いや待て、シンパー、世の常の愚人共は、其様な虚禮虚辭にも惑はされ、心嬌り氣高ぶり、朝令暮改の愚政道を肯てする者なしとも申されず。乍去此シーザーの体内には、愚人を惑はす阿諛諂佞、三拜九拜の虚禮などで、惑はさるべき汚血は一滴もない。思ふに卿が舍兄バプリアス・シンパーには、此程追放の沙汰を蒙りたれば、卿此一旦の沙汰を破り、舍兄の赦免を請はむが爲め、かくは平身低頭致すと見え、た此推了に相違なくば、早々此處を退りめされい。シーザーは妄りに非道の沙汰は致さぬ、又理由なく一旦の沙汰を棄ても致さぬ。

とメテラス立ち上る

ラメステ

いかに方々の中には、愚兄御赦免の儀に就き、御意見を開陳致され、

シーザー公の御心を齟されむざる御方はなきか。

スタル

（にシイザの前）シーザー公に申し上げます、先づ某へは、かう御手に

接吻を御許し下され、但しこれは尊公への阿諛ではムらぬ、さてバ
リアス・シンパー儀は、何卒速かに御赦免あるやう、此某も懇願致し
まする。

とアル立ち上る

ザシ

何と申す、ブルータス。

アカツシ

（じく跪きながら）御免あれシーザー公、此カツシアスも御前に

平伏し、バリアス・シンパー御赦免の儀を偏へに願上げ奉りまする。

ザシ

いや誰が何と申さうとも、予が心は動かし難し、哀訴を以て人の心

を動かさむなどは致さぬ拙者、人の哀訴にも、此心は動かされず、譬
へば此身は北極星の、萬古不易不變の姿は、茫たる天上にも絶えて其
儔を見ざるが如し、（とカツシア）空を彩どる幾萬億の星辰は、何れか燦
として、輝く火ならぬはなしといへども、古今唯一星ありて其座を動
かず、此地上に於ても亦此の如し、見よ蠢爾たる地上の人間、何れか血
肉の塊團ならぬはなく、何れか多少の思慮分別を、具へぬはなしと雖
も、頑として己れを守り、寸毫も動揺することなきは、幾億萬中唯一人
あり、乍不肖、予は即ち其一人を以て任ずる者、證據は眼前、シンパー追
放の儀は、動きなき予が意見、未來永劫此一旦の沙汰は變るまいぞ。

ナシ

（にシイザの前）おしシーザー公に――。

ザシ 愚かく、オリンパスの山は移すとも、此心は移すべからず。

アデスシ (シザの前) 大シザに申上げます。

ザシ へ、ブルータスが平身低頭の哀願さへ、其效なきを知らざるか。

カスカ 然らば拙者は、此腕を以て申入れうず。

とメテラス、シザの衣を捉ふる——カスカ、シザの頸を刺す、シザ、カスカの腕を制する——其時徒黨大勢シザの身邊に集りて刺す——最後にマーカス・ブルータス留めを刺す

ザシ ブルータス、卿もか——扱はシザ、ちえ、汝が命數も是迄なり。

とシザ、ボムメイの彫像の下に隠れ瞑目する、議事員及び人民等混雑の體にて退場

ナシ 自由は蘇生れり、虐主は倒れたるぞ人々、早々走り出て、此赴を羅馬の街上に觸れよ人々。



議事員の方々に始る人民一同速めて
さなる大望の爵は下れど人々

アカスシ 誰ぞ公會場の

壇上より、自由は蘇生り羅馬は救はれる由を披露られよ。

タプスル 議事員の方々を始め、人民一同速めてめさるな、逃ぐるには及ばぬ、停まれ、停まれ、大望の爵は下れるぞ人々。

カカス ブルータス殿、貴殿壇に御上りなされ。

アアスシ カツシアス、貴殿も御上りなされ。

タアスル バブリアスは如何致した。

ナシン 此騒動に、混迷の軀にて此處に居ります。

ラメステ いや方々御用心あれ。シーザーが腹心の者など現れ出て――。

タアスル 要らざる心配でゐる――これさバブリアス殿、確乎めされ、今は

安穩なる卿が身の上、羅馬の民は皆なかくこそ、此儀彼等に御告げ下

されバブリアス殿。

アカスシ して早う此處を御立ちあれバブリアス殿、心得違への者共が、我

等に向ひ推寄せ参らぬとも申されぬ、貴殿の御老躰に、若しもの事が

あつてはなりません。

タアスル 左様なされ、此騒動の跡始末は、我等に於て一切引受け、他人に迷惑は相懸けぬ。

トレボニアス(先刻アントニーを場外に誘)再登場

アカスシ お、トレボニアス、アントニーは何處に。

ニトアスボ 遠てふためき、我が家を指して逃げゆきました――いやもう市

中は、大騒動、男女老幼顔見合せては、叫び狂ひ、走り廻る有様は、恰ら天

地滅却の日に、めぐり合せた様でゐる。

タアスル あ、それにつけても、吾人共に知りたきは己が命數なり、いつか

は死ぬる日ありとは、人皆の知る所なれども、いつとしも分かれぬ冥途

の門出、只だ生存の日數をば、一日も長うせむと力むるぞ、敢果なき人

間の仕業なる。

カス いや、我から二十年の天壽を切詰むる者は、取りも直さず、二十年の憂き苦勞を切詰むる者ではムらぬか。

タプスル 果して貴説の如くならば、人を討つは人に恩恵を加ふると申すもの、我等もシーザーが幾何年の憂き思ひを除き遣したれば、取りも直さず我等は彼が恩人でムらう——いや方々、此上は我等が手を、腕ウデを、腕ウデぐるみ、シーザーが血潮に洗ひ、我等が劍に血クハを塗り、群衆の巷を闊歩して、此腕此劍を頭上に翳し、一同揃つて平和よ自由よと揚言致さむ。

アカスツシ 然らば一同、かう屈んで手を濕ほしませう——想へば我等が今日ヒトの此大業は、後代迄も美名を留め、未見の國に未聞の國語コトバで、狂言歌舞伎の花と匂ふてムらう。

タプスル 實に今大ボンペイが石像の下もとに、塵より出て、塵に還りしシーザーが、此後とも幾度か舞臺の上に刺殺さるゝ事てムらう、

アカスツシ 其度毎に我等徒黨は、國家の自由を救ひ留めたる、義人義士と持て囃さるゝ事てムらう。

アダスシ さて方々、此上は一同出立致さうではムらぬか。

アカスツシ いかにも打揃うて出立致さう、先達せんたつはブルータス殿、我等は後より、義勇並びなき羅馬魂たましいを、頭に翳して御供致さう。

アントニーが耶黨登場

タプスル 御待ちあれ方々、何者か参りし様子、アントニーが耶黨いひではないか。

耶黨 ブルータス公に申上げます——主人マーク、アントニーの申付に

従ひ、かくは膝行頓首致し(なと跪拜し)主人の口上を申上げます——
ブルータス公には、賢明にして又勇敢に渡らせらるゝ、又シーザー公
には器度宏大にして膽氣あり、忠勇無二に渡らせられた、さればアン
トニー儀は、ブルータス公を慕ひ且つ敬ひ進らす傍ら、シーザー公
をも同じく慕ひ且つ敬ひ進らせ、又畏れ憚る所がムつた、乍去今日と
相成つては、若しブルータス公に於かせられ、アントニー只今參上致
すとも、必ずとかうの御咎めもなく、シーザー公殺害の御理由を熟(まじ)と
御論し下されうならば、マーク・アントニーに於いては、以來死せるシ
ーザー公より生けるブルータス公を慕ひ進らせ、何事もブルータス
公の御指圖に従ひて、今日の時世に處し、忠實(まこと)くしき心を以て、御運
を共に致したいと申します、先づは主人アントニーが口上此くの

通りでムります。

タブ
スル
げに足下が主人アントニーは智勇並び絶れたる羅馬の士人、某
はいつもさやうに思ひ居りしぞ、(と耶黨立上る)足下はこれより歸つて白さ
れよ、いかにもアントニー殿此處へ御出あらば、シーザー公殺害の儀
に就き、御不審の廉を晴らして進ぜう、まつたアントニー殿の一身は
必ず安全に護り進らす旨を告げられよ。

耶黨
左様なれば私は、早速主人の供を致し、改めて參上致すてムりませ
う。

と耶黨退場

タブ
スル
いやアントニー參る上は、必ず我等が一味徒黨に加はらむは明
かなり。

アカツシ 何卒左様に致したいものでムるが、某はまだ何とやら油断のな
らぬ心地が致します。然るに兎角かやうな疑心は事實と成つて顯
るゝが、某徒來の經驗でムる。

アントニー再登場

タプスル 一 ヤア、アントニーが參着致したし、ようこそマロク・アントニー殿
ニアント 一 おゝ大シ！ザ！公、此御有様は何事ぞ。

と先づシ！ザ！の屍骸の傍に跪ぎて

想へば公がこれまでの、征戰征馬の功勝利も名譽も、只だ此の五尺の
御屍骸の中に縮まりしか、おゝこれが此世の御名残りてムる、さらば
さらば――

と起上りて

さて方々、御思召の程は存ぜねども、まだ此上、御手に懸けらるゝ仁は
ムらぬか、若し此某などを、棄て置き難しとの御意でムらば、シ！ザ
！公御最期ありたる、今日只今に優る折はムらぬ、又世界廣しと雖も、
又と一人あるべしとも思はれぬ、此偉人の血を以て塗りたる、方々が
劍に優る武器はムらぬ筈、ハテ方々には某を憎き者に思召さば、其眞
赤な御腕から、血烟の立昇る、其中に、何卒少しも早う御果し下され、千
年萬年待てばとて、此様な死期が又あらうとは思はれず、これなるシ
！ザ！公の遺骸の傍にて、當代の義人傑士たる、方々の御手に斃るゝ
程、某に取り満足なる死様も、死場所もムらぬ。

タプスル 一 おゝアントニー殿、我等への其無心御無用でムる、我等が所業と
此赤い手を御覽あらば、いかにも我等は殘忍酷薄の輩とも見ゆるて

ムらうが、所詮貴殿等の御目に留まるは、我等が此手と、此手を以てなしたる、腥い所業ばかり、我等が心中は御覽あるまい、我等が心中は至つて涙脆うムる、たゞ火を以て火を消すの例、シーザーが非業の最期に泣く涙を、大羅馬の國難に注ぐ涙を以て洗ひ流しさてこそ此の如き誅戮も行ひたれ、乍去聞かれよマーク・アントニー、貴殿に對しては我等が劍も鉛の刃、大義に凝つては、さしも情を知らざりし我等が腕も、兄弟の心を以て貴殿を迎へ、互に友愛を盡し、奥底なう語り合はさう所存でムる。

アカツシ 又事落着の後は、何れ貴殿も我等に劣らぬ顯要の地位に就かる事てムらう

タアル 先づ差當り、心も心ならず、惑ひ合へる人民共を、なだめ賺す迄御

待ちあれ、さて其上にて、かく申す某が、自ら手を下す其時迄も、シーザー公を慕ひ進らせながら、かゝる所業を肯てしたる、仔細を委しく御話し申さむ。

ニアント 其御心の美しさを、少しも御疑ひは申しませぬ——此上は方々改めて其血に染みた御手をば、一々某に下されい(握手を要求せるなり)先づマカスブルータス殿御手を下されい、次にはカイアスカッシアス殿御手を下されい、さてデシアスブルータス殿勇敢無雙のカスカ殿、さて最後に——御免あれ親疎の隔てを致す譯ではムらぬ——トレボニアス殿御手を下されい——おゝ方々——ハテ何と申上げて宜しいやら、某が覺束ない今日の立場、定めて方々には舊友を棄つる卑怯者、さらば權家に阿ねる無骨士と御蔑なさるてムらう——

とシーザーの屍骸の上に身を屈して

お、シーザー公、某これまで、公を御慕ひ申せしに相違はムらぬ、御亡
靈草葉の陰より、此有様に御眼留められ、御寵愛のアントニーは、現在
御屍骸の傍にて、血腥き御敵の手を握り、同好の契りを籠むると御覽
じては、恐らく殺害の御非運に御逢なされし其事よりも、一層堪へ難
く口惜しく思召さるゝ事てムらう、あゝ其御傷口の數程、此某に眼があ
つて、其數の眼元より、御傷口の血潮程も、涙を注ぎ流してこそ、相應は
しとも人は見め、御敵人と新なる交りを結ぶとは何事、御寛容あれジ
ユリアス公——想へば此處に追詰められ此處に果敢なく御落命の
御身は狩場の鹿、功名の狩人共は、血潮に諸手を彩どりて、稀代の獲物
に勝誇る此有様、おゝ此廣き世界は、此鹿の住む森にして、此鹿こそは

其森の主なりしに、げにや鹿は狩場の花、貴人達の手に懸り、脆くも此
處に倒れたりな。

アカスツシ これ、マールク・アントニー——

ニアント 御免あれカツシアス殿、シーザーが日頃の敵と雖も、これ程の事
は申すてムらう、まして年來寵愛を受けたる身に取りては、冷やかな
る追悼の一言、御咎めを蒙る程の事とも思はれず。

アカスツシ いや某は、貴殿が其様にシーザーを、讃へらるゝを咎めは致さぬ、
乍去貴殿には、如何なる好誼を我等と御結びなさるゝ思召てムる、我
等が徒黨の一人と、御名を聯ねられう御量見か、さては我等は貴殿に
御構ひなく、我等の道を進みませうか。

ニアント それ故にこそ方々の御手を取りたる次第、乍去かくシーザーの

屍骸に眺め入りて、不覺の涙に暮れたるは、實に某の心得違、いや某は
以來方々の御味方で、たゞ何故にシーザーが國家の蠱毒にて候
ひしか、熟と合點の參るやうに、其仔細を承はりたうム。

タプスル
如何にも其仔細を御承知なくば、我等の所業は、たゞ殘忍の舉動
と見ゆるて、ムらうが、其仔細と申さば、アントニー殿、貴殿が縦しやシ
ーザーの血を分けた子息なりとも、實にこそと合點の參る程、確かな
る理由がム。

ニアント
某が承りたいと申すは、即ち其理由で、又此上の御願には、御
屍骸を公開場に荷ひ行き、シーザー公が生前の友たる情誼に依り、壇
上にて棺前供養の辭を述ぶるを何卒御許し下されい。

タプスル
いかにも承知致して、ム、アントニー殿。

アカスツシ
（アタル所へ、伴ひ行き）ブルータス殿、一言申し上げたい事が、ム
——只今の御承諾は、餘りの御輕卒、アントニーが棺前の弔辭は如何
て、ムらう、彼が辯舌故に、人民共が惑はされ、煽かされ、いかやうの大事
を仕出すやも測られませぬ。

タプスル
（カツシへ）御心添忝ない、乍去かく申す某が先づ壇に上り、シーザ
ー殺害の理由を述べ、次にアントニーが述ぶる所は、我等の許可を得
たる上の事なる由を告げ知らせ、まつたシーザー埋葬の儀は、凡て國
風に從ひ、あらゆる儀式を公然に行ふ事を、我等に於て承諾致す旨申
聞かせせう、さらば我等が利益となる事は、ムらうとも、不利益となる
事は、ムるまじ。

アカスツシ
（旁白）ハテ、成行が案じられる事で、ム、某はどうやら心が進み

ませぬ。

タプスル　さてマークアントニー殿、然らばシーザーの屍骸を御引取あれ、但し棺前供養の辭を述ぶるに就きては、一言たりとも我等を御誹謗はなりませぬ。尤もシーザーの功德を讃めそやす分の事は、其許の隨意でゐる、たゞ豫め我等の許可を得て、申述ぶる旨仰せられい、若し此儀に御異存もムらば、葬式萬端には一切御手出無用でゐる、又其許が供養の辭を述べらるゝ演壇の儀は、前以て某が登壇致し、一言申述ぶる事がゐるに依り、其詞の終るを待ち、某に代り同じ壇上にて申述べられい。

ニアント　某とても其上の御願はムらぬ。

タプスル　然らば遺骸を取纏め、我等の後から御出あれい。

とアントニー一人の外凡て退場

ニアント

(傍に跪きながら) 御許あれ御亡靈許し難き御敵人に對し、某が

かく手緩き舉動を致し居るも、心に思ふ仔細のあればこそ、あゝ古今に絶れし大偉人も、此様におなりなされたか、憎むべきは天下の偉人が、紅血を濺ぎし、刺客の手案せらるゝは羅馬の行末、おゝ紅玉の唇を開いて、某に舌を借せ聲を借らむと、宣はせ給ふかと思奉る御傷口、おゝ其無言の仰せに従ひ、試に御心中を推察し、此舌を以て羅馬の成行を申さうなら——疫癘日ならずして市民の頭に落ちかゝり、内亂族闘伊太利の國內を搔き亂し、血河は流れて小止みなく、殺氣四方に満ち満ちて、見る物聞く物の、何れか恐ろしからぬ者もなきが常となり、子を持てる母親は、戰場に屠られたる、我子の屍骸に微笑を作り、柔か

き人情は、殺伐の風習故に痕も留めず、かゝる間をシーザ公の亡靈には、復讐の執念失せ難く、騷擾の女神アテイを引具し、急ぎ冥府の門を出て、此殺伐の巷を彷徨ひ、帝王の如き聲を張り上げ、破滅あれよと叫びつゝ、戦國の巷を狂ふなる、禍亂の狗を放たせ給はむ、されば今日シーザ公殺害の大罪は、戦國の世の有様、死人を埋むる主もなく、野に棄てらるゝ腐肉より、立昇る臭氣と共に、此地上に蔽ひ廣ごり、天地も爲めに暗憺たらむは眼に見る如し。――

此時オクタピアスが家臣一人登場

おゝ、汝はオクタピアス・シーザ(大シの子なり)が家來ではないか。

家臣 御意の通りでムります。

アント 然らば大シーザ公には、オクタピアス殿へ向け、急ぎ羅馬へ御

上りあるやう、御書面を御遣はしなされた筈。

家臣 いかにも其御書面を御披見なされ、只今羅馬へ御上り中でムりますが、アントニ様へ口づから申上げよと私への御申附――

とシーザの屍骸を見て

ヤア、シーザ公には――

と悲嘆に胸を詰らすこなし

アント ウム、汝も胸に迫つた様子、其方向いて隨意に泣け、身共も悲しさが差して參る、汝が眼中に湧出る、悲みの雫を見るにつけ、身共が眼も濕んで參つた――して汝が主人は御上り中とな。

家臣 今夜は此羅馬から、七里足らずの去る所に、御泊りあるとの仰出てムります。

ニアント 然らば汝は大急ぎにて馳せ戻り、事の次第を言上致せ、今此羅馬は、憂愁の雲に閉ぢられ、危嶮の狭霧立ち蔽ひ、別してオクタビアス殿の御身に取りては、安全の地とは申されず、急ぎ此赴を言上致せ、とは云ひながら、暫く待て、身共は此御死骸を、これより公開堂に御供致し群衆の前にて、追善の辭を述ぶる筈、群衆共が身共の詞を聞き、逆賊共の所業に就き、如何様の感情を致すべきか、其を確と見届けたる上、今日の事態しかくと申す所を、オクタビアス殿へ申上ぐるが宜しからう——いざ、汝も手傳へ致せ。

とシーザーの屍骸を携へ一同退場

第二場——全上——公開場

奥にて市民の驚々たる叫び聲聞ゆる、ブルータス、カッシアス及び市民大勢登場

大市民 仔細を聞かう、理由といふを承らう。

ブルータス 然らば身共に従て參れ、語つて聞かさう——カッシアス殿、貴殿は何處ぞ、他の街頭へ御出なされ、此群衆を二箇所に別けませう——いかに人々、ブルータスが談話を聞かむと望む者は、此まゝ、此處に留まられよ、又カッシアス殿が、談話を聞かむと望む者は、他處へ御供を致されよ、何れにもせよ、シーザー殺戮の仔細をば、公けに申聞かさう。

甲市民 儕はブルータスの談話を聞く。

乙市民 儕はカッシアスの談話を聞く、そして別々に聞いた仔細を、後で比べて見るとしよう。

とカッシアス市民の半分を伴ひ退場

ブルータス壇に上る

市民

それブルータス公が上つた、静かに。

タル
ス

いかに羅馬の市民、祖國の民、我が懐かしのはらからよ、謹んで大義名分を承れ、先づ我がこれより申述ぶる詞の端を、漏なく聴聞あらむ爲め、暫く靜肅に控へ居られよ、我ブルータスが人となりにめて、努我が詞を疑ふ可からず、又我が詞に疑を挿まざらむが爲め、ブルータスが人となりを努々疑ふことなかれ、さて汝等の智慮分別に照し合せて、熟と我詞の善惡を判じ見よ、又善惡の判斷を、明かならしめむが爲め、各の胸に手を當て、全身の智慮分別を呼び起せよ。——いかに此群衆の中に、豫てシーザーを崇め慕へる者あらば、我は其者に告げ

て申さむ、ブルータスがシーザーを慕へる心も、決して汝に劣ることなしと、若し其者、然らば何故ブルータスは、シーザーを討てりやと問はむ、我は答へて申さむ、ブルータスがシーザーを思ふの念小なるにあらず、羅馬を思ふの念更に大なるなりと、試みに問はむ、汝等はシーザー死して、我等自由の民と生存へむよりも、只一人のシーザーを生あらしめ、羅馬の市民悉く奴隸と朽果つるを欲すか、我ブルータスはシーザー我を愛するが故に感泣し、シーザー武運めてなきが故に、共に悦喜し、シーザー勇敢なるが故に尊敬せり、されども、シーザー一度野心を抱きしが故に之れを討てり、彼が寵愛には涙を捧げ、彼が武連には喜びを捧げ、勇氣には尊敬を捧げ、さて彼が野心には死を捧げたり、あゝ汝等の中、誰か甘んじて奴隸たらむ程卑屈なる市民ありや、あ

らば申せ、我は其者の意に忤らひし筈、又汝等の中、誰か羅馬の市民たるを厭ふ程、心鄙びたる者ありや、あらば申せ、我は其者の意に忤ひし筈、さては汝等の中、誰か我が國家を愛せざる程、心さもしき者ありや、あらば申せ、我は其者の意に忤ひし筈、いざ／＼此返答を承らむ。

大市民

さやうの者は一人もない／＼。

マスル

然らば我ブルータスは、何人の意にも忤らはぬ、畢竟、我がシーザーに爲したる所は、汝等がブルータスに對しても、爲すべき所に外ならず、シーザー討戮の理由は、何れ議事廳の記録に載せらるべく、彼が羅馬の爲めに盡したる功績は、其一分をも縮むる事なく、又彼が、それ故、誅戮の憂を見たる罪科も、其一厘を増すことなく、有の儘に子孫に傳はらむ。

此時四人の人夫シーザーの屍骸を棺架に載せて登場、後よりアントニー等登場

あゝ、彼見よ、マクアントニーが、シーザーの屍骸に附添ひ、泣の涙で参られた、あゝ、彼のアントニーは、シーザーの討戮に、一指をも染めざれども、シーザー亡き後の福利を受け、共和國の民たるを得るは、汝等に異ならず、聞かれよ、我ブルータスは、此一言を以て汝等に別を告げむ——ブルータスは、羅馬の福祉の爲めに、我が最愛の友を屠りたり、若しいつにても羅馬の國家、ブルータスの死を欲すとあらば、ブルータスは今日友を屠りたる、其の劍を此身に受くるを辭せずと知られよ。

と壇を下る

大市民 いや／＼ブルータス公、何時迄も壯健たつしやて在おほせ。

甲市民 序ついでに御館みやたまで、賑やかに御送り申さうではないか。

乙市民 御先祖同様の彫像を、此公にも奉れ。

丙市民 此公をシーザーの後に直さうではないか。

丁市民 いかにもブルータス公を後に直せば、シーザーの美質よぶとくみだけが、王位に備るといふものぢや。

甲市民 サア／＼ブルータス公を、囃音頭はやしんどで送り込こまうではないか。

タプスル いや／＼祖國の民――。

乙市民 ヤイ／＼、静かにしやれ、ブルータス公が物を仰せらるゝ。

甲市民 静かにしやれ／＼。

タプスル いや懐かしの國人、志は嬉しけれど、其心配こころづかいは無用なるぞ、汝等おれらは

我が爲めに、アントニーと共に此處に留まり、シーザー公の遺骸を拜し、又アントニーが我等の許可ゆるぎを受け、故公の遺烈に手向くる、追善の辭ことばを聽いて遣はせ、いやブルータスが汝等への願ひには、アントニーが辭終ことばるまで、一人も餘さず、此の處に留まり居れ、我は一人にて歸館致さむ。

とブルータス退場

甲市民 さらば此處で、アントニーの悼辭くみを聞くとせうかい。

丙市民 いかにも、早う壇へ登らせて聞くとせう――アントニー公、早う／＼、

アントニー プルータス公の御情を以て、汝等一同にかく見ゆるは、拙者身に
取り此上の喜びはない。

とアントニー壇に上る

丁市民 何、ブルータス公を何と申した。

丙市民 ブルータス公の御情で、我等一同に見ゆるは喜ばしいと申された。

丁市民 此處でブルータス公の、讒訴など申したなら、無事は済むまい。

甲市民 想へば此シーザーは、暴君であつたよなア。

丙市民 いかにも其通り、羅馬の國が、此様な暴君の手を遣れたは嬉しい事

じゃ。

乙市民 コレ靜かに、アントニーが詞を聞きやれ。

ニアント いかに我が羅馬の良民達——

大市民 コレ靜かに、聞えぬ。

ニアント 我が懐かしの友よ、羅馬の民よ、祖國の民よ、暫く汝等が耳を借ら

む、かく申す拙者は、シーザー公御遺骸を、埋めむが爲めに参りし者、今

更公が功績を、讃げむがためにはあらず、夫れ人間一生の罪過は死後に残り、一代の功勞は、骨と共に埋もるゝこと珍らしからず、惟みるに、シーザー公が一身亦此の如し、彼の高德の譽れ高きブルータス公には、故公非望を懐ける由、汝等に告げしよな、誠に其御詞の如くならば、痛ましき罪過といふべく、又故公には、痛ましくも其報いを受けさせられた、此アントニーは、ブルータス公、並に一味の方々の許容を受け——あゝ想へばブルータス公は當代の君子、一味の方々とても、悉く當代の君子ならぬもなし——故公の御葬儀に莅み、追悼の一言を、申述べむが爲めに参りし者、仰も故シーザーは、此アントニーが、兼て追慕の友なりしが、他人は知らず、アントニーに對しては、信義に深う在されたり、なれどもブルータス公の御詞には、故公非望を抱かれたと

申す、してかく申さるゝブルータス公は、當代の君子に在す。又シーザ
 ー公には、度々の外征に、數知れぬ敵國の捕虜を連れ還り、其度毎に莫
 大の贖回金を得て、之を悉く羅馬の國庫に積み、己が私腹を肥せしこ
 となし、あゝ此の如き御行爲に、非望ありとは誰が目に見えしぞ。又羅
 馬の下民共、一年貧苦に泣きし時、シーザー公には、彼等と共に泣かれ
 しならずや、あゝかゝる優しき胸の中に、非望は果して宿るべきか、な
 れどもブルータス公は、シーザー非望を懐けりと申されたり、但しか
 く申さるゝブルータス公は、當代の君子に在す。又去んぬるルバカ
 ルの祭日に、此のアントニーが、三度王冠を捧げたるに、シーザー公に
 は、三度そを退けられしは、汝等とても眼の當りに見られし如し、あゝ
 想へばこれが何の非望なれどもブルータス公は、シーザー非望を懐

けりと申されたり、してかく申さるゝブルータス公は、疑もなう當代
 の君子に在す——いや拙者はブルータス公の御詞を、とやかく申さ
 るゝとは思はず、只だ我が知れる所をさながら申し述ぶるに過ぎず、又
 汝等にも一度はシーザー公を慕はれしが、實に慕ふべき理由ありけ
 ればならむ、然るに今將た何の理由あつて、公の爲めに哀悼の涙を注
 ぐをさへ屑しとは思はざる、あゝ道理は去つて、禽獸の肚裡に隠れ、人
 は分別を失ひたるか、許せよ人々、拙者が心は、今故公の棺中に逃げ入
 りたり、其心の此胸に還り來る迄、アントニーは早や詞をも出し難し、
 甲市 民 聞けばアントニーの詞にも一理はある。
 乙市 民 とつくりと考へて見れば、どうやらシーザー公には、無實の罪で殺
 された様ぢや。

丙市民 さうであらう、どうやら却つて一段と恐ろしい虐主が、現れさうに思われるわ。

丁市民 今のをよう聞きやつたか、シーザー公は、王冠を受け附けぬ、なりや非望を抱かぬは確かな事ぢや。

甲市民 ほんに其通りなら、こりや此まゝには過されぬ。

乙市民 見やれいとしほげに、アントニー公が眼は、泣き腫らして、火のやうに眞紅ぢやわい。

丁市民 聞きやれ、又口を開いた。

ニアント 大シーザーの一言には、世界も鳴りを鎮めしは、遂昨日の事なるに、今日は果敢なき此御姿、如何なる卑賤の民なりとも、畏れ敬ふ者はあるまい、おゝ人々、汝等が心を嘸かし怒りたけり狂はしむるは易け

れども、さては汝等も知れるが如く、當代の義人君子たる、ブルータス公、さてはカッシアス公を辱かしむると申すもの、某は左様の事は致さぬ、かやうなる義人君子を辱めうよりは、寧ろ口なき死人を辱かしめ、拙者自らを辱しめ、さては汝等一同を辱めう覺悟なるぞ、乍去聞かれよ、茲に一枚の書附あり、こはかく申す拙者自ら、故公御手馴しの手函の中より、探り求めしものなるが、豫てより認め置かれたる御自署の遺言状なり、苟も羅馬の民たらむ者、此書附の赴を聞知らば——素より拙者に之を讀聞かさむ意はなけれど——直ちに奔り寄つて、御遺骸の傷口に接吻し、所持の手巾を其難有き血に漬し、さては御髪の毛の一條を紀念に乞受け、家の寶と末長う、子々孫々に譲り傳へ、秘藏致さむなど、誓めさかくる事なるべし。

丁市民 何ぢや遺言ぢや、聞かにやあならぬ、アントニー公、御讀上げ下され。

大市民 遺言ぢや、シーザー公の遺言を聞かにアならぬ。

ニアント 暫く、優しの我友、讀上ぐることは叶ふまい、シーザー公が如何ばかり汝等を受せしか、そを承知致さば、汝等が身の爲めならず、汝等とても、木にもあらず、石にもあらず、情を知る人間ならずや、苟も人間の皮を被らむ者、シーザー公の遺言を聞かば、忽ち火の如く怒り立ち、物狂ほしくもなり果てむは眼に見る如し、シーザー公が遺言して、汝等に遺物を残せりと聞くは、汝等の爲めではあるまい、若しさやらの事を聞くなれば、おゝ其後の成行が思ひ遣られて恐ろしや。

丁市民 いや是非共御讀み下されアントニー公、此まゝ聞かずには濟まされぬ、遺言を御讀み下され、シーザー公の遺言を。

ニアント いや暫く、此一事を汝等に打明けたは、返すくも某が過言、シーザー公を殺害致せし、彼の君子達へ無禮には當らぬか、案ぜられる事ではある。

丁市民 ヤア、何の君子達、彼奴等は謀叛人ぢや。

大市民 遺言聞かう。

乙市民 いや彼奴等は悪黨ぢや、暗殺者ぢや、遺言聞かう遺言讀め。

ニアント さては一同には、何處迄も某に、遺言を讀ませうとな、あゝ、悔いても及ばぬ事ぢや、然らば一同御屍骸の周圍に環を作つて並ばれよ、先づ此遺言の主が御有様を、一同に示したい、就ては某は壇を下る、一同承知であらうな。

大市民 承知々々、少しも早う。